

上総南西部における古墳終末期の様相

小 沢 洋

はじめに
1. 小糸川流域

2. 小櫃川流域
小 結

論文要旨

古墳時代の上総南西部には2つの強大な政治領域が存在していた。一つは小櫃川流域の馬来田国であり、もう一つは小糸川流域の須恵国である。この両地域では古墳時代のほとんどの期間を通じて継起的に大形古墳の築造が認められ、房総の諸首長層の中でも、とりわけ安定した勢力を維持していたことが窺われる。

小糸川流域では、前期の段階には中・下流域の丘陵上に前方後方墳が拠点的に存在する状況であるが、中期以降には下流沖積地の内裏塚古墳群を中心に首長墓群が形成される。5世紀中頃に房総最大の前方後円墳・内裏塚古墳が築かれて後、6世紀前半代など一時的に首長墓の存在が不明確な時期もあるが、6世紀後半期には継続的な100m級前方後円墳の築造が見られ、中小規模の前方後円墳・円墳を含めた首長系集団の墓域を形成する。7世紀代に入ると、割見塚古墳を始めとする幾つかの方墳が築造され首長系集団の墓制が一新される。これらの方墳は二重周堀・切石積石室といった強い共通性を有しており、房総諸地域の斉一的な終末期方墳形成の中での階層的な意味付けがあったと考えられる。

小櫃川流域では、前期の段階にすでに中流域の小櫃地区を本拠とする首長勢力があり、飯籠塚古墳・白山神社古墳といった大形前方後円墳が築かれている。しかし中期に入ると高柳銚子塚古墳を初現として下流沖積地の祇園・長須賀地区に一貫して首長墓群が形成されるようになり、以後は小糸川流域と非常によく似た展開をたどる。ただし小櫃川流域の首長墓の多くが今日では消滅しているため、編年の関係が不明な部分も多い。また6世紀末葉の金鈴塚古墳を最後に、小櫃川流域では終末期の首長系古墳（方墳）が確認されておらず、上総最古の寺院・大寺の出現と関連してその動向に大きな疑問が残されている。

はじめに

本稿で述べる上総南西部は、旧君津郡域（現在の袖ヶ浦町・木更津市・君津市・富津市の4市町）に相当する。房総半島のうち、東京湾沿岸の南半部から、三浦半島に最も接近する富津岬を経て、浦賀水道に面した地域であり、その南縁は鋸山と清澄山を東西に結ぶ房総丘陵によって、半島南端部の「安房国」との境界が画される。

古墳文化様相よりみた上総南西部は、小櫃川水系、小糸川水系、および湊川など小糸川以南の諸水系という3つの地域圏に大きく区分することができる。この3つの地域圏は、君津郡成立以前の3郡、望陀郡・周准郡・天羽郡の領域にはぼ重ねあわせて捉えることができるであろう⁽¹⁾。このうち小櫃川・小糸川の両水系には、下流域から中流域に至る顕著な古墳分布が認められ、特に両河川の河口付近には、それぞれの水系を統括した首長層の墓域と見られる大形古墳の群在が認められる。小糸川下流域の内裏塚古墳群、小櫃川下流域の祇園・長須賀古墳群がそれであり、前者は「国造本紀」に見える須恵国造、後者は同じく馬来田国造の奥津城に比定されている。両水系では、各々独立した政治領域を形成し、古墳時代のほとんどの期間を通じて、安定した勢力を維持していたことが窺われる。

一方、湊川など小糸川以南の諸水系（天羽地域）では、高塚古墳の分布密度が低く、代わって多数の横穴墓群の分布が認められる点で、上記の2水系とは様相を異にしている。この地域においては、独立的、存続的な首長権の存在は認めることができず、むしろ小糸川水系の首長層の領域圏の中に組み込まれていたか、もしくは従属的存在であった可能性が強い。この地域の横穴墓造営の最盛期は7世紀代にあると認められ、古墳時代終末期の西上総を概観する上でこれらの様相も看過することはできないであろう。本稿では主として、小糸川・小櫃川両流域における終末期の高塚古墳について述べるが、小糸川以南地域を中心とした横穴墓群の概要についても、可能な範囲で取り上げてみることにしたい。

1. 小糸川流域

(1) 小糸川流域における首長系古墳の消長

小糸川流域における首長系古墳、特に中期以降の首長墓域は、河口部沖積地に位置する内裏塚古墳群を中心に展開している。しかしこの古墳群内および近隣地域に大形前期古墳の存在は確認されておらず、また6世紀前半代にも大形古墳造営の空白期が想定されるなど、各時期の盟主墳が必ずしも当古墳群内に集約されていないことは明らかである。

一方、当地域では近年の発掘調査および分布調査の進展により⁽²⁾、これまであまり周知されていなかった中流域における古墳様相も徐々に解明されつつあり、それらを踏まえて小糸川流域にお



図1 房総の古墳時代終末期大型古墳と古代寺院(縮尺40万分の1)

ける首長系古墳の推移をたどってみることにしたい。

a. 前期

これまでのところ、小糸川流域においては、前期の前方後円墳は確認されておらず、未調査古墳の中にもそれに該当するような古墳は見当たらない。この点、前期から複数の大形前方後円墳の造営が認められる小櫃川流域とは対照的な在り方を示しているといえる。

ただし、木更津市小浜地区に所在した手古塚古墳（墳丘長60m）は、従来小櫃川水系の首長墓として論じられることが多かったが、その位置は小櫃川・小糸川両水系の中間というべき地点にあり、小糸川流域の首長墓群との系統的繋がりを想定することもできよう。

これに対して、前期の築造と見られる前方後方墳は2基確認されている。下流域外箕輪地区の台地縁辺部に立地する道祖神裏古墳（墳丘長56m）は、君津郡域の前方後方墳の中では最も規模が大きく、確認調査で周堀内から五領式土器が検出されている。また最近墳丘測量が行なわれた中流域福岡地区の駒久保6号墳（墳丘長42m）は、一回り小さな規模であるが、立地・墳丘形態ともに道祖神裏古墳に近似している。これら2基の前方後方墳が今のところ前期段階における最有力の古墳として捉えられるが、墳丘規模などから見る限り、その被葬者は小糸川流域全域を傘下に置くような強大な首長ではなく、より狭い地域を統合する小地域支配者層であったと考えられる。

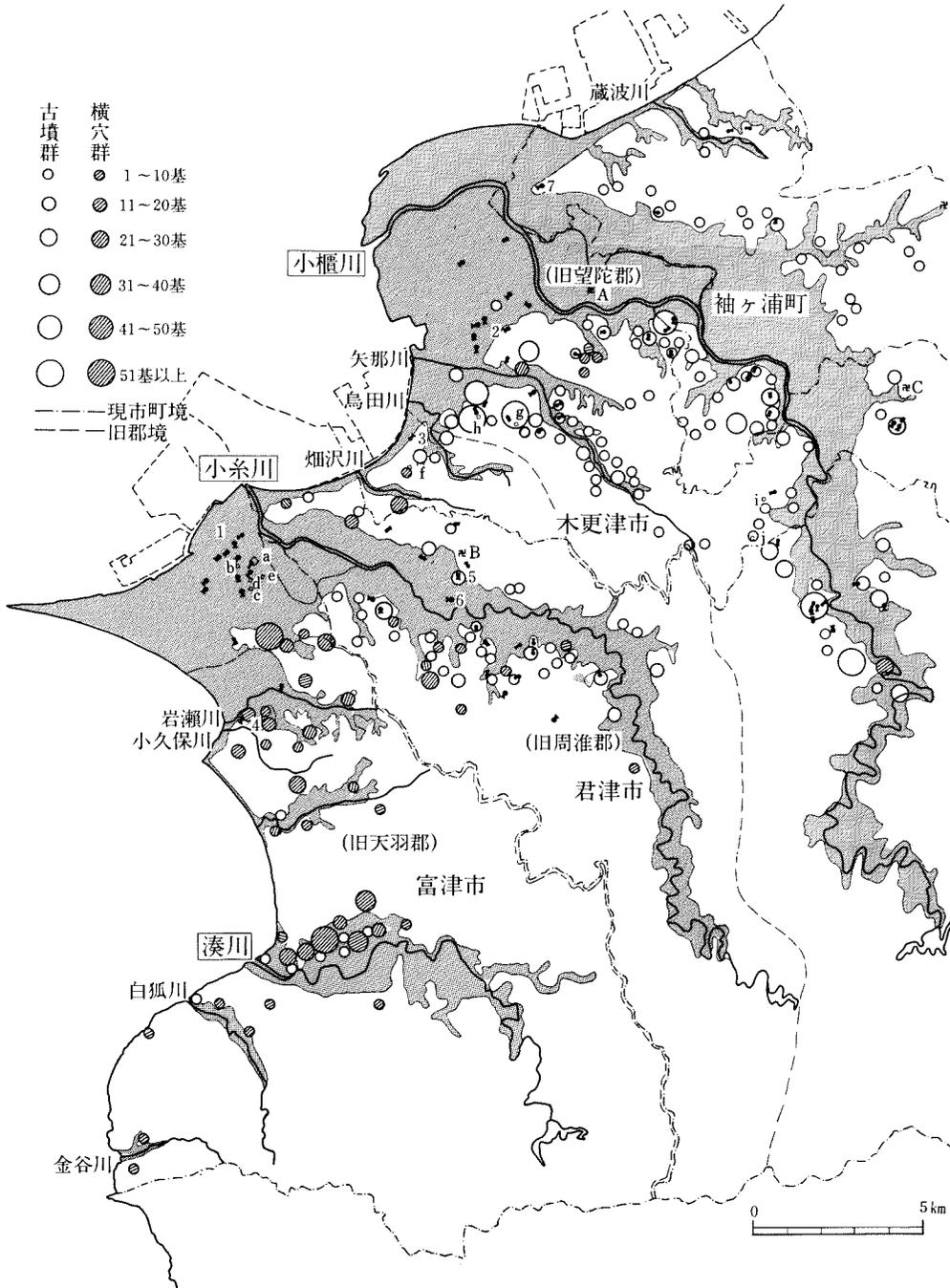
b. 中期

河口低地部の内裏塚古墳群内で、最初に築造されたと見られる古墳は、群中最大規模の内裏塚古墳（墳丘長144m）である。調査時期が古く、墳丘主軸に平行して存在したといわれる2基の竪穴式石室の構造については不明点が多いが、金銅製胡籥・鳴鏑などを含み武器・武具・農工具類のみから構成される副葬品セット、B種ヨコハケを伴う円筒埴輪等の年代観から、5世紀中葉頃の築造年代が想定される。現段階の知見では、この内裏塚古墳の出現を以って、小糸川水系全域を席卷するような首長権が成立したと考えられる。

因みに内裏塚古墳に先行する可能性のある前方後円墳として、道祖神裏古墳の至近に位置する八幡神社古墳（墳丘長86m）がある。低地に築造され盾形周堀を備えた前方後円墳で、墳丘の平面形態は、後円部径と前方部幅が拮抗する中期型のプランを示し、周堀形態も前方部側への開きが小さいU字形と見られる。近年後円部側周堀の一部が発掘調査されたが、時期決定の手掛りとなるような遺物は何ら検出されず、埴輪も採集されていない。ただ前方部の相対的な長さが内裏塚古墳を上回っていること、また規模に比して墳丘高が著しく低い点などは、この古墳を古く位置づけることを躊躇させる要素であり、6世紀前半あるいは6世紀後半の築造という見方もあつて、当古墳の年代的な位置づけについてはなお流動的である。⁽³⁾

内裏塚古墳に後続する首長墓として、内裏塚の南方4kmの小久保地区に単独で存在する弁天山古墳（墳丘長86m）が挙げられる。墳丘規模の上では内裏塚よりも劣るが、高い墳丘と盾形周堀を備え、天井石に縄掛突起を持つ特異な竪穴式石室を有する点など、盟主墳として遜色のない内容を備えている。鋌留甲冑片を含む武器・武具・農工具を主体とした副葬品、円筒埴輪の年代観から、5世紀後葉に比定するのが妥当であろう。

一方、内裏塚古墳群内では、小規模前方後円墳である上野塚古墳（墳丘長45m）が内裏塚に後続する古墳として位置づけられる。内部施設は不明であるが、周堀底から出土した陶器TK23型式併行の須恵器坏によって、やはり5世紀後葉期の築造と考えられる。弁天山古墳との先後関係



終末期方墳 a 割見塚古墳 b 野々間古墳 c 森山塚古墳 d 亀塚古墳 e 稲荷塚古墳 f 関田古墳群
 g 山伏作古墳群 h 塚原5号墳 i 北谷古墳 j 宮脇古墳群
 主要前方後円墳 1 内裏塚古墳群 2 祇園長須賀古墳群 3 手古塚古墳 4 弁天山古墳 5 道祖神裏古墳
 6 八幡神社古墳 7 坂戸神社古墳
 初期寺院址 A 大寺廃寺 B 九十九坊廃寺 C 真里谷廃寺

図2 上総南西部地域古墳・横穴群分布図 (1/200,000)

については、直接対比する資料に欠けるが、当古墳の方がやや後出と見られる。墳丘形態は帆立貝式の範疇に含み得るものであり、この古墳の時期に「古墳の規制」が行なわれたとする見方もできる。ただ内裏塚古墳との墳丘規模の格差は著しく、この古墳を盟主の系列の中に位置づけ得るかどうかについては、なお議論の余地があろう。

c. 後期

6世紀前半代(初頭～前葉)の築造と見られる古墳は、内裏塚古墳群内には見当たらない。墳丘形態の進化論的变化という観点より見るならば、先に取り上げた外箕輪・八幡神社古墳がこの間の空白を埋める可能性もある。

6世紀中葉～末葉にかけては、九条塚古墳(105m)・三条塚古墳(123m)・稲荷山古墳(106m)・古塚古墳(88m)・青木亀塚古墳(100m)の5基の大形前方後円墳が内裏塚古墳群内に相次いで築造されたと考えられる。このうち三条塚・青木亀塚以外の3基はいずれも埴輪の存在が確認されている。

このうち、墳丘平面形態の上では九条塚古墳が最も古い特徴をとどめる。明治末年の発掘記録から内部施設は横穴式石室と判断されるが、構造の詳細は明らかでない。石室内出土遺物として、直刀・金銅装馬具(楕円形鏡板付轡・雲珠)・銀製耳環・銀製空玉・碧玉勾玉・瑪瑙勾玉・水晶切子玉・ガラス小玉等が伝わるほか、前方部墳頂出土とされる須恵器群(坏・高坏・甗・台付直口壺など)⁽⁴⁾がある。このうち須恵器は陶邑TK43型式期に比定し得るものである。また採集された円筒埴輪は、最下段凸帯が低位置にあり、凸帯高も低い台形を呈するもので、川西編年V期の古相と判定される。前方部の須恵器群と主埋葬の間に若干の年代的開きを確認するとしても、築造時期の上限は6世紀中葉頃までと考えるのが妥当であろう。

三条塚・稲荷山の両古墳の墳丘形態を比較すると、前方部長・前方部幅とも稲荷山古墳の方が相対的に大きくなっているが、盾形周堀(二重)の前方部側への開きの度合いには大きな差は見られない。墳丘高は両者とも低い。稲荷山古墳に円筒・形象埴輪が確認されているのに対して、三条塚古墳には埴輪の存在が認められず、この点を重視するならば、稲荷山→三条塚の構築順序を想定するのが妥当であろう。なお九条塚と稲荷山の埴輪片を比較すると、稲荷山古墳の埴輪の方に、より凸帯の扁平化が認められる。

三条塚古墳は、最近1989年の暮に内部施設の部分調査を実施した結果、自然石乱石積で石室高の高い横穴式石室を有することが確認され、乳文鏡・直刀・馬具(鞍・壺鍔金具・金銅製鞍金具)・金銅製中空耳環・漆塗小玉・須恵器(高坏・壺蓋)などが出土している。須恵器は陶邑TK43型式期に比定されるものであり、九条塚古墳前方部出土須恵器との間に大きな時間差を認め得ない。石室が自然石積である点と須恵器の示す年代は、先に見た埴輪の有無から三条塚古墳を最終末段階の大形前方後円墳に位置づける妥当性を必ずしも肯定する要素とはなっておらず、稲荷山古墳との先後関係については今なお明言できる段階でない。

100m以上の盟主クラスよりやや規模の劣る古塚古墳は、やはり前方部の発達した平面形態で

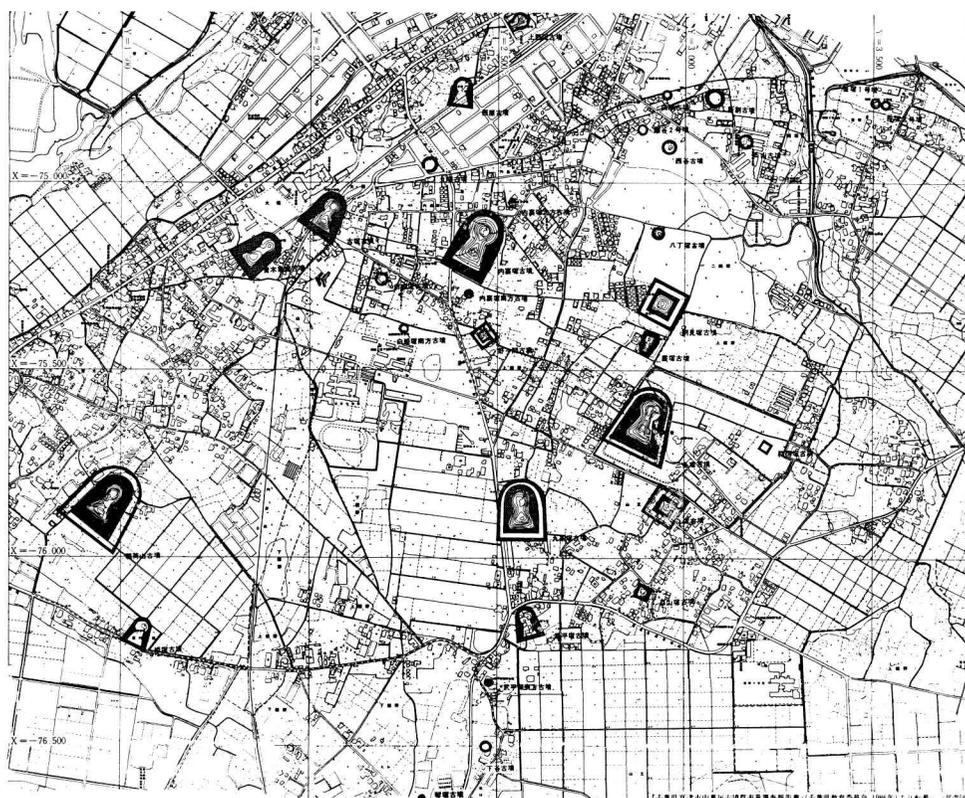


図3 内裏塚古墳群古墳分布図 (1/20,000)

あり、1989年度の確認調査で盾形周堀の輪郭が明らかとなった。100m未滿の前方後円墳の中では唯一円筒埴輪を有しており、その時期相は稲荷山古墳と同等かやや先行する段階と見られる。内部施設は、ボーリング探査により、横穴式石室と推測される。

青木亀塚古墳は、墳丘がきわめて低平であり、括れ部付近の等高線の流れも不整であることから、前方後円墳であることに疑問が持たれていたが、1989年度に確認調査を実施した結果、盾形周堀の存在が確認され、前方後円墳と判定されるに至った。墳丘は少なからず後世の改変を受けているようである。この調査では墳頂部にもトレンチを設定して、内部施設の確認も合わせて行なったが、何らその形跡を認めることができず、また周堀部からは時期的に整合しない8世紀代の土器が検出されるなど、この古墳については依然多くの疑問点を残している。

6世紀後半以降、内裏塚古墳群においては、上記の大形前方後円墳のほかに、墳丘長50～70m級の前方後円墳、および多数の円墳群の築造が認められ、首長層内部での階層的分化、古墳被葬者層の拡大が進行したと考えられる。

西原・武平塚・姫塚・蕨塚の4基の前方後円墳のうち、西原を除く3基は、それぞれ6世紀代の3基の大形前方後円墳に近接して造営されていることが注目される。武平塚と九条塚、姫塚と稲荷山、蕨塚と三条塚の組み合わせがそれで、3組とも大小の古墳の主軸がほぼ等しく、相互の緊密な関係を推測し得る。これらに対して西原古墳はやや孤立的な位置にあるが、主軸方向は九

条塚・武平塚と共通する。上記の古墳のうち、武平塚は未調査のまま墳丘の大半が削平されているが、西原・姫塚・蕨塚の3基の前方後円墳については、いずれも自然石乱石積の横穴式石室を内部施設としていることが知られている。石室形態は、西原古墳が無袖式、姫塚・蕨塚古墳が片袖式で、西原古墳に8体、姫塚古墳に5体、蕨塚古墳に12体以上の埋葬人骨が確認されており、各古墳とも長期にわたる追葬期間があったと考えられる。1989年に再調査を実施した西原古墳の石室は、前部・奥部の幅員差がほとんどない狭長なプランで、床面全体に整美な礫敷きが施されたものである。⁽⁵⁾西原古墳からは陶器TK43型式期の須恵器が出土しており、築造時期は6世紀後葉と推定される。調査時期の古い姫塚古墳に関しては、石室実測図等十分な記録がなく、不明な点が多い。蕨塚古墳も出土遺物の詳細が公表されていないが、報文中の写真に見える須恵器長頸壺など新しい遺物相を含んでおり、追葬期間を考慮しても、築造時期は西原古墳より下の6世紀末葉前後であろうと推測される。

円墳は、現在知られているものの大半が発掘され、そのほとんどが自然石乱石積の横穴式石室を有している。小糸川流域では、横穴式石室を有する円墳が密集するのは内裏塚古墳群周辺に限られ、⁽⁶⁾丘陵部の後期古墳の多くは木棺直葬系と⁽⁷⁾考えられる。そして内裏塚古墳群内の円墳は概して副葬品の質量の豊富なものが多いことから、これらは一般の群集墳とは異なり、首長系集団の構成員を被葬者とする円墳と考えてよいだろう。

中でも白姫塚古墳は、飾大刀4本・挂甲等他の円墳に比べてかなり卓越した副葬品を有していたことが知られるが、⁽⁸⁾発掘時期が古いため石室の形状等が明らかでない。丸塚・古山・新割の3古墳の石室は、内部に区画のない狭長な無袖式のプランを呈することで共通している。このうち、丸塚古墳の石室内には1基、古山古墳の石室内には2基の組合せ式箱形石棺が内蔵されていた。これらの古墳は円墳の中でも規模が大きく、とくに新割古墳においては造出しの存在が確認されている。

西谷古墳の石室は、奥部・前部の幅員差が大きい無袖式で、石室内には板石による玄室の区画が見られ、玄室部の床面にのみ大形自然石の敷設が認められている。これに対して、向原・八丁塚の2古墳の石室には床面の一部に切石の使用が認められる。八丁塚古墳の石室は、無袖式でも入口に玄門構造を備えるやや幅の広い石室で、奥壁寄りに仕切り石が設置され、前室・後室に区分される。後室の床面には砂岩切石が敷かれるが、奥壁に接した最奥部のみ自然礫の敷かれる空間があり、棺床のようにになっている。向原古墳の石室は、奥部がL字形に屈曲する特異なプランで、屈曲部に板石による仕切りがあり、そこから奥壁までの床面に切石が敷かれる。なお1989年に新発見・発掘調査された古墳群南端部の下谷古墳においてもL字形石室の存在が明らかにされたが、切石の使用は認められなかった。

このほか、墳丘削平後の確認または未発掘古墳である西谷2号・白姫塚南方・琴塚・笹塚1号などの諸古墳においてもそれぞれ乱石積横穴式石室の存在が想定され、円墳の実数は、現在認知されている総数(12~14基)をかなり上回るものであったと考えられる。

以上の円墳は出土遺物の詳細が公表されていないものも多く、十分な編年の検討を行える段階ではないが、石室の構造からは、丸塚・古山・新割の3古墳に古い様相が見られ、西谷・下谷古墳がこれに次ぎ、向原・八丁塚の両古墳に新しい様相を認めることができよう。⁽⁹⁾

各古墳の出土須恵器を見ると、白姫塚古墳から陶器編年TK43型式古相(中村編年Ⅱ-3段階)、新割古墳・丸塚古墳・下谷古墳からTK43~TK209型式(Ⅱ-4~5段階)、古山古墳・西谷古墳・八丁塚古墳からTK209~TK217型式前半(Ⅱ-5・6~Ⅲ-1段階)、向原古墳からTK217型式後半(Ⅲ-2段階)のものがそれぞれ出土している。上記の円墳の石室内からは、丸塚古墳で約10体、新割古墳で20体以上、西谷古墳で13体以上、向原古墳で14体の埋葬人骨が検出されたといわれ、出土遺物にも当然追葬の時間幅を考慮する必要があるであろう。石室の構造および追葬期間を勘案して暫定的に各古墳の築造年代を推定すると、白姫塚古墳・新割古墳・丸塚古墳を6世紀後葉、古山古墳・下谷古墳を6世紀末葉、西谷古墳・八丁塚古墳を7世紀初頭、向原古墳を7世紀前葉に位置づけるのが妥当ではないかと考えられる。

(2) 小糸川流域における終末期古墳の様相

内裏塚古墳群では7世紀前半のある段階から、盟主の墓制に方墳が採用され、古墳群形成の最終的な段階として、方墳のみが造営される時期が到来したと見られる。これらの方墳と前代の前方後円墳・円墳の系譜的・年代的関連については、なお多くの検討の余地を残すが、方墳の造営開始に当たって古墳造営者層の大幅な再編があったことは確かであろう。現段階の知見では、内部施設への全面的な切石の使用が認められるのは、方墳採用以降の段階と認識され、少なくとも当古墳群内では墳丘・内部施設の両様式において、方墳出現後とそれ以前の段階とを明確に区分することが可能と思われる。

内裏塚古墳群内においては、終末期方墳もしくはその可能性が高い古墳として、割見塚古墳・亀塚古墳・森山塚古墳・野々間古墳・稲荷塚古墳・内裏塚北方古墳(推定)の6基を列挙することができる。首長系古墳群の中に占める終末期古墳の数としては、他の諸地域と比較して大きい割合と見做すことができよう。房総では、千葉市東南部地域・成田市公津原地域など、小規模群集傾向の強い終末期古墳の密集地域を別とすれば、大形前方後円墳群と同一墓域内に多数の方墳が造営されている例は少なく、近似した首長墓域の形成を示す小櫃川・養老川下流域の古墳群と比較した場合、その差異は顕著である。以下、個々の古墳の内容について、墳丘・内部施設・出土遺物の各要素別に検討してゆきたい。

a. 墳丘・周堀規模と企画性⁽¹⁰⁾

一辺40mで、群中の方墳では最大の割見塚古墳は、墳丘規模の上では房総の終末期古墳の中で目下第3位であり、第1位の岩屋古墳の約1/2、第2位の駄ノ塚古墳の約2/3の大きさに相当する。しかし、1983・1984年の確認調査で明らかとなった二重周堀全域を含めた兆域規模は、同じく二重周堀を有する駄ノ塚古墳のそれを凌駕し、単一の周堀しか有さないと見られる岩屋古

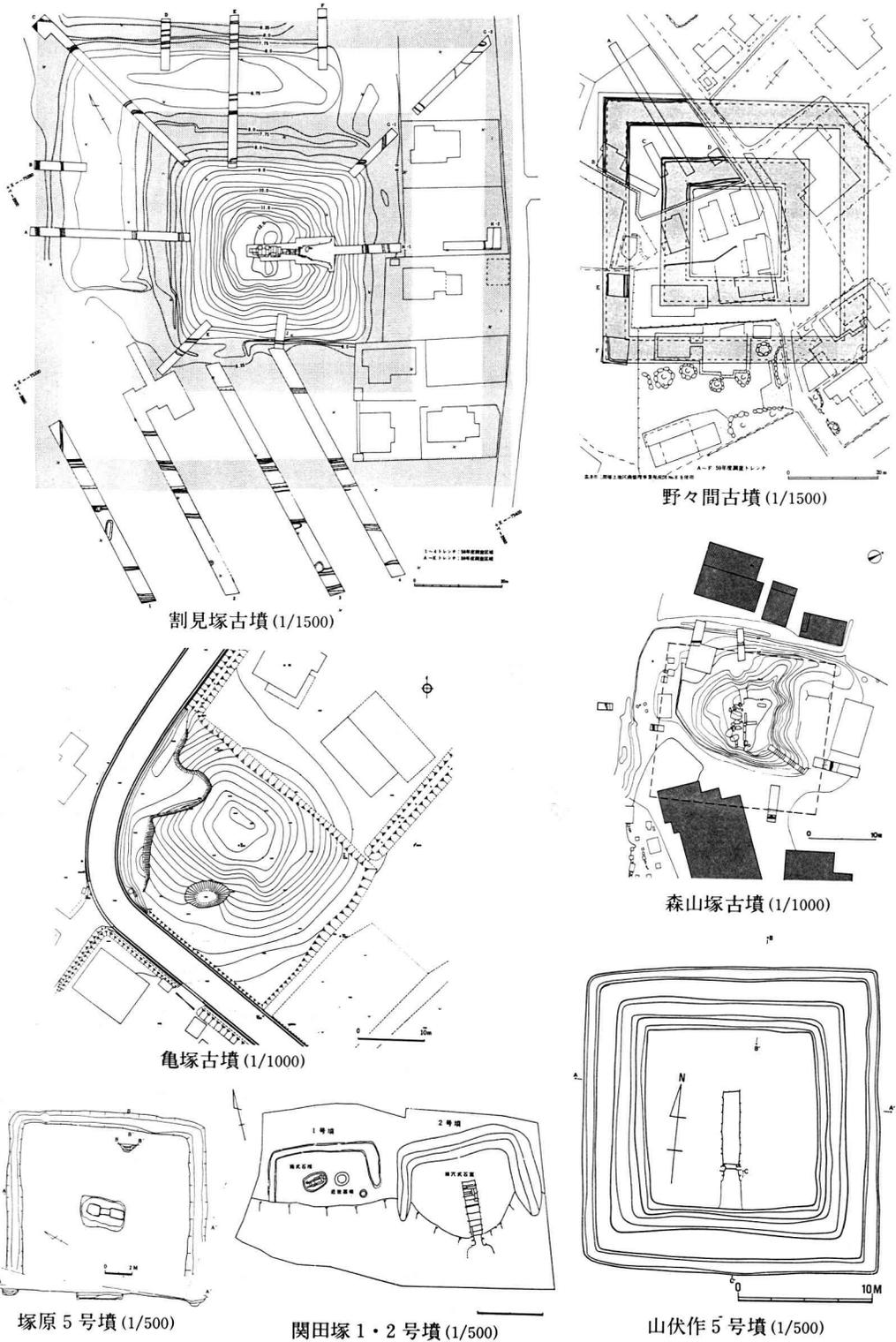


図4 上総西南部地域の終末期方墳

墳の兆域に拮抗する規模となっている。因みに岩屋古墳の墳丘は明瞭な3段築成であるが、最上段の墳丘が割見塚古墳とほぼ同規模、中段部までの墳丘が駄ノ塚古墳とほぼ同規模であることも注目されよう。岩屋古墳・駄ノ塚古墳がともに台地上に立地しているのに対し、割見塚古墳は標高8m前後の低地に築かれており、墳丘規模に比して周堀規模を相対的に著しく拡大している点は、このような立地条件とも多少の関連があるものと思われる。

割見塚古墳の築造企画について検討すると、墳丘辺長40m・内周堀外辺長63m・外周堀外辺長107mという計測値は、それぞれ高麗尺（1尺約35cm）の120尺・180尺・300尺に近い数値と見做すことができ、墳丘・内周堀・外周堀の外郭規模が、2：3：5の整数比で企画設計された可能性を示している。またこれらの外郭規模を規制する内周堀幅・周堤幅・外周堀幅の各値についても、それぞれ高麗尺の30尺・40尺・20尺に近い値となっている。

亀塚古墳は群中第2位の規模をもつ方墳で、1989年の確認調査により二重周堀の存在が判明した。トレンチの設定箇所の制約により多少の数値の変動も見込まれるが、墳丘辺長が33m、内周堀幅は北東辺と南東辺で相違があり、北東辺で12.5m、南東辺で9m、周堤幅・外周堀幅は南東辺側での確認でそれぞれ12m、7.5mを測る。これらの数値に基づいて周堀外郭規模を復原すると、内周溝外辺長は北西―南東間で53m、北東―南西間で58m、外周溝外辺長は同じく91mと98mとなり、高麗尺換算で墳丘辺長100尺・内周溝外辺長150尺（170尺）・外周溝260尺（280尺）の企画が想定される。内周溝幅は25尺と35尺、周堤幅は35尺、外周溝幅は20尺の配分となる。

森山塚古墳は群中第3位の規模の方墳で、1983年の調査により周堀の一部が発掘された結果、墳丘辺長26.4～27.0m・周堀幅7.8m・周堀外辺長42.0～42.6mという計測値が得られ、現存する墳丘範囲をかなり上回る墳丘規模を有していたことが判明した。ただし周堀外壁を確認しているトレンチは1箇所のみであり、周堀幅・外辺長については若干変動する可能性もある。また二重周堀の確認は行なわれていないが、割見塚・亀塚・野々間3古墳の例から考えれば、二重周溝であることはほぼ確実と見られる。報告書では、唐尺による墳丘辺長90尺の企画が想定されたが、高麗尺換算で墳丘辺長80尺・周堀幅20尺・周堀外辺長120尺という企画尺が他の方墳との比較上、妥当性の高い数値と見做される。

野々間古墳は第4位の規模の方墳で、墳丘は削平されているが、1984年の確認調査で二重周堀の存在が判明し、その後1987年にも周堀の一部を面的に調査している。その結果、内周堀幅7.0m・周堤幅7.0m・外周堀幅5.8mという計測値が得られ、外郭規模は墳丘辺長19.0～19.5m・内周堀外辺長33.0～33.5m・外周堀外辺長59.0～59.5mと復原される。高麗尺に換算すると、墳丘辺長60尺・内周堀外辺長100尺・外周堀外辺長170尺の企画尺と考えることができ、内周堀幅と周堤幅が20尺、外周堀幅が15尺の配分となる。

稲荷塚古墳については、墳丘・内部施設が未調査のまま削平されているが、大正末末の報文に「一辺ノ長サ約十間」（約18m）と記載されていることから、野々間古墳と同程度の規模の方墳であったと推測され、残存する周堀の確認調査が待たれる。

以上述べたように、内裏塚古墳群内における終末期古墳の築造企画には、一定の規則性を看取することができるようである。その規則性とは、各古墳の墳丘規模が、最大規模の割見塚古墳に対して6:5(亀塚), 3:2(森山塚), 2:1(野々間)といったような比関係にあること、各古墳とも二重周堀を有すると見られること、設計尺として高麗尺を使用していた蓋然性が高いことなどである。因みに高麗尺の使用に関しては、終末期以前の段階まで遡る可能性がある。というのは、当古墳群内の6世紀代の大形前方後円墳の墳丘長を高麗尺に換算すると、いずれも完数尺にはほぼ整合する値が得られるからである。すなわち、九条塚古墳・稲荷山古墳は300尺(105m)、三条塚古墳は350尺(122.5m)、古塚古墳は250尺(87.5m)にそれぞれ一致し、確認調査で二重周堀の全形が判明した三条塚古墳では、内周溝全長159mが450尺に、外周溝全長193mが550尺に対応することも注目される。

高麗尺の日本への伝来は6世紀中葉頃とされ、畿内では6世紀後半の大王陵に相当する見瀬丸山古墳・欽明陵古墳の計測値が高麗尺の完数に整合的値を示すことはすでに知られている⁽¹¹⁾。このような点から見れば、内裏塚古墳群における上記のような数値の整合性は、あながち偶然の一致によるものとはいえないだろう。しかし後期前方後円墳の設計尺については、なお他地域の古墳を含めて十分な比較検討を重ねる必要があり、今後の課題としておきたい。

それはさておき、終末期古墳の墳丘規模には、一般的に強い規格性を見出すことが可能と思われる。たとえば房総においては、岩屋古墳・駄ノ塚古墳・割見塚古墳の墳丘規模が、4:3:2という数比で捉えられることもその現われであり、数の上では多い40m未満の終末期古墳についても一定の数値への墳丘規模の偏在性がある程度認めることができるようである。但し周堀調査が実施されている古墳はまだ少なく、使用尺度の問題も含めて、今なお熟慮すべき点は多い。また二重周堀の規格については、内裏塚古墳群内独自の法則性を認める必要もあるようであり、それは方墳数の多いこと、沖積地という立地条件とも関連するものと思われる。

b. 内部施設の構造

割見塚古墳の内部施設は、棺室・後室・前室・羨道の各部から構成される複室構造をなし、全長11.7mを測る。羨道部の前面には八字形に開く自然石乱石積の前庭部が付設され、これを含めた内部施設の総全長は18.75mに達する。石室床面は、奥の室へ向うに従って段階的に高く構築されており、棺室部と羨道部の床面比高差は66cmを測る。石材取得を目的とした盗掘によって、天井石・奥壁と右側壁の大部分を欠失する状態であるが、左側壁第1段には高さ1m以上の大形切石が使用されており、各石材が垂直面より5°内傾するように、縦断面平行四辺形に加工されている。側壁上半部は、おそらく比較的小形の切石が持ち送り状に積まれていたものと推定される。

森山塚古墳の内部施設は、玄室・羨道から構成される両袖式の単室石室であるが、羨道と玄室の間に1.2mの段差をもつ特殊な構造となっている。羨道部両側壁の第1段に大形切石を使用し、玄室床面の各所にL字形切り組みが認められる点など、構築技術面においては割見塚古墳との共通性が高いが、側壁を垂直に立てている点は割見塚古墳と異なり、これは玄室・羨道幅が狭いこ

とに由来するものであろう。石室現存長は7mであるが、羨道部はさらに前面へ延びていたと見られ、周堀との間隔から考えて、前庭部を伴っていた可能性も強い。

野々間古墳の内部施設は、実測図等の詳細な記録を欠いているが、平面形態は片袖式であったといわれ、推定全長7.5～8m・玄室長5m前後と記録されている。割見塚古墳・森山塚古墳と同様に、側壁には大形切石を使用し、床面は大小の切石を組み合わせで構築されており、玄室壁の一部には朱の塗布が認められたとされる。前庭部は確認されていない。

亀塚古墳の内部施設は、明治末期に発掘され、「柴田常恵野帳」からおおよその概要が知られていたが、1989年の確認調査でその一部を再発掘し、前庭部を備えた切石積石室であることが確認されている。側壁に大形切石を使用し、床面が切石切組手法によっている点は上記の諸古墳と同様である。前庭部の自然石積の状況も割見塚古墳と近似したものである。

稲荷塚古墳の内部施設は、全く記録が残されぬままに破壊されてしまったため、関係者からの伝聞によって切石積石室であったらしいことを知り得るに過ぎない。

内裏塚北方古墳の内部施設については、内裏塚古墳の報文中に「東北約二十間に在る円塚は先年発掘せられしが、二個の石槨を有し、一は中央に於て南を正面とし、大石を刻みて組成せられ、一はその西方数尺を隔ちて並行の位置を為し、規模前者に比して小さく、箱形のものにて、羨道を有せざるものゝ如く、発見の遺物に至りては毫も知るに由なし。」と記され、切石積横穴式石室と箱形石棺の2基の施設を別々に蔵していたと推定される。1983年の確認調査で跡地周辺より切石が出土していることから、その記録の一端が裏付けられている。

以上、当古墳群内の終末期方墳（内裏塚北方古墳については墳形が確定していないが）の内部施設には、いずれも砂岩切石積の横穴式石室で、側壁に大形の石材を使用し、切組みの床石を有するという共通した要素を認めることができる。これらの石室構築技法は、当古墳群内において方墳出現以前まで伝統的に採用されていた石室構築技法とは断絶的とも言える違いを示しており、その出現の背景には、近隣または遠隔地からの多面的な影響と技術の導入が考えられよう。

最も長大な割見塚古墳の横穴式石室において、最奥部に「棺室」を付設する構造は、房総では他に例を見ないものであり、以前から指摘されているように、畿内を中心とする「横口式石槨」との近似性を認め得る。中でも河内飛鳥と呼ばれる大阪府羽曳野市東部の丘陵地帯に所在する一連の終末期古墳（観音塚古墳・オーコー8号墳・鉢伏山西峰古墳など）の内部施設構造に、当古墳石室の直接的な技術系譜を求める説が有力視されており、同地方の工人の関与を想定する向きもある⁽¹²⁾。しかし河内飛鳥地域の諸古墳は、いずれも墳丘規模が10～15m程度の小古墳であり、一部に複室的構造を備えるもの（観音塚古墳）があるとはいえ、石室の規模も総体的に小さい。当古墳の石室が、棺室部の付設という構造等において、仮にこの地域からの技術的影響を受けているとしても、石室全体の長大さ、複室構造という基本的側面においては、関東地方における切石積横穴式石室の独自の展開の中に位置づけて考えてみる必要がある。

関東における複室横穴式石室の分布には、2つの主要な集中圏を認めることができる。一つは

比企地方を中心とした北武蔵地域、もう一つは上総を中心とした房総地域であり、前者は胴張り形態の玄室プランをもつことで特色づけられる。このほか上野・常陸・南武蔵にも複室横穴式石室が散見されるが、数の上では少ない。ただし南武蔵の場合は、横穴式石室墳の絶対数からみて、複室横穴式石室の出現頻度は高いものといえよう。

房総の複室横穴式石室は、全てが砂岩切石積であり、前方後円墳・方墳と一部の円墳に伴う内部施設として確認されている。前方後円墳としては千葉市土気舟塚古墳・松尾町権現塚古墳・同町蕪木5号墳・成東町不動塚古墳・我孫子市第4小学校古墳の各例、方墳では成東町駄ノ塚古墳・市原市牛久皿号墳・成田市瓢塚27号墳例、円墳とされる東金市家之子24号墳例などがあり、千葉市土気地区を含めた山武郡地域にやや偏在する傾向が見られる。

山武地域では、前・中期段階の有力古墳の存在がほとんど明らかにされていないが、6世紀後半代には大形・中形前方後円墳の拠点的、連続的な造営が認められ、東京湾沿岸の小櫃川・小糸川流域に拮抗する強大な首長権を確立したと見られる地域である。この地域では埴輪、特に形象埴輪の著しい盛行が知られるが、複室横穴式石室を採用している前方後円墳は、いずれも埴輪消滅後の新しい段階に位置づけられる古墳となっている。換言すれば、山武地域では最末期段階の首長系前方後円墳の多くが複室横穴式石室を内部施設としているといえる。

前段階の埴輪を有する前方後円墳の石室については、松尾町朝日ノ岡古墳・成東町西ノ台古墳など調査時期の古い盟主墳の石室構造が詳らかでないが、横芝町殿塚古墳、姫塚古墳・山武町埴谷1号墳などの石室構造が明らかにされている。これらはいずれも、切石積石室を採用している点で、内裏塚古墳群内の前方後円墳とは相違するが、特に姫塚古墳の石室は、矩形の玄室に幅の狭い矩形の羨道部が接続するもので、両者が門柱石によって区切られている点は、複室化へ向かう前段階的形態として捉えられる。一方、殿塚古墳・埴谷1号墳の石室は、仕切石によって玄室内を区分したものであり、様式は異なるが、やはり複室的要素を備えた石室として捉え得る。他地域に先んじて切石積石室を採用した山武地域では、このようにある程度段階的に複室横穴式石室への発展を辿ったと見ることができ、東京湾沿岸地域における切石積石室・複室石室の出現の背景には、この地域からの直接・間接的影響を想定してよいであろう。

ただ割見塚古墳の石室の場合は、長い羨道部が独立して付加されている点、側壁に大形切石を使用している点など、山武地域の複室横穴式石室とは別系統の技術的影響も多分に看取される。また石室が長大な点も終末期古墳の中では群を抜いており、この点はむしろ内裏塚古墳群内における自然石乱石積段階からの長大な石室構築の伝統と無関係ではないと思われる。内裏塚古墳群内の前方後円墳・円墳の石室全長を列挙すると、西原古墳12.5m、蕨塚古墳11.5m、新割古墳12.5m、丸塚古墳11m、古山古墳12.7m、西谷古墳7.3m、向原古墳約10m、八丁塚古墳11.2mで、ほとんどが割見塚古墳の石室長に前後する規模であるとともに、房総の他地域では見られない長大な石室群として捉えられる。

以上述べたように、割見塚古墳の複室横穴式石室の成立の背景には、①山武地域を中心とする

切石積石室複室化の趨勢，②西上総地域における長大な石室構築の伝統，③畿内からの新しい石室様式の導入，といった複合的条件があったと見做すべきであろう。なお複室化の意義そのものについては，同墓埋葬者と埋葬空間区分の問題からさらに考究を深める必要がある。

一方，森山塚古墳の石室に関しては，隔壁によって羨道・玄室を区画する構造をもった横穴墓との関連が指摘されている。⁽¹³⁾この形式の横穴墓は，西上総地域においても多く見られるものであるが，後述のとおり，当地域における横穴墓の形態変遷の上では後出的形式として把握され，当古墳の石室の方がむしろ時期的に先行する可能性が強い。隔壁型（高壇式）横穴墓が盛行したのは長生郡などの東上総地域であり，この地域の隔壁型横穴墓は，隔壁高がより高く，技巧的に横穴式石室を凌ぐような荘厳なものも多々認められる。隔壁型横穴墓の上限は今なお不明確であるが，その遡源形態は東上総に求められる可能性が高く，森山塚古墳の石室構造にこの種の横穴墓との関連を求めるとすれば，東上総地域からの影響を考える必要もあろう。

c. 出土遺物と年代観

割見塚古墳は既に盗掘を受けていたが，1964年の調査では直刀・鉄鏃・金銅製弓弭・帯金具が出土し，1984年の再調査では前庭部前端を中心に，鉄製杏葉・鉄製鏡板・銅製帯金具類（爪形帯先金具・方形有窓飾金具・円形辻金具・亀甲形金具）・刀子装具（銀製鞘尻金具・金銅製柄頭金具）・弓師鋌・鏃・鉄鏃・須恵器台付長頸壺・土師器坏などが検出されている。

土師器坏3点は，いずれも暗文を有するものであるが，うち1点は畿内からの搬入品と見られ，飛鳥藤原編年Ⅲ～Ⅳ期（坏C類）に比定し得る。また在地系の放射状暗文を有する坩形坏は，当地域の集落で7世紀前葉から後葉にかけて普遍的に見られるものであるが，口縁部が直立的である点などから比較的古相に位置づけてよいであろう。須恵器長頸壺は，口縁部・頸部・体部・台部の非接合破片であり，口縁部については別個体のフラスコ型瓶である可能性がある。生産地については，いずれの破片についても湖西産の特徴を示すという教示を得ており，口縁部の形態は7世紀前半まで遡る可能性が強いとされる。⁽¹⁴⁾

馬具類のうち鉤貝付心葉形透杏葉は，奈良県二塚古墳・静岡県中石田古墳・群馬県乗附・正倉院御物および近隣では木更津市松面古墳に類例があり，6世紀第4四半期を初現例として7世紀前半代に中心をもつ型式と把握されている。⁽¹⁵⁾この型式の杏葉の多くが金銅製であるのに対して，当古墳のものは鉄地である。同じく鉄地の長方形透鏡板も，7世紀前半代に盛行する型式と捉えられ，一連の銅製帯金具類もこれらと同一のセットとして把握されよう。

鉄鏃は鏃箭式を主体として一部無関片刃箭式を含み，7世紀前葉から後葉期に盛行する組成として捉えられる。以上の出土遺物は，いずれも原位置を保つものでなく，追葬による年代幅も想定する必要があるが，少なくとも6世紀代まで遡る要素は乏しく，遺物相の中心的な年代は，7世紀前葉～中葉期に求めるのが妥当ではないかと思われる。

野々間古墳からは，1968年の緊急発掘時に，銀象嵌方頭大刀・刀子・鉄鏃・金銅製弓弭・金銅製耳環・鉄釘・銅製飾鋌・緑釉新羅焼有蓋台付壺など比較的多数の遺物が回収されている。この

うち新羅焼有蓋台付壺は、国内では福岡県王城山C11号墳・京都府大覚寺3号墳・奈良県石神遺跡など北九州・畿内を中心とした幾つかの出土例が知られている。王城山C11号墳の伴出須恵器は陶邑編年(中村編年)Ⅱ-6~Ⅲ-1段階、大覚寺3号墳の伴出須恵器はⅡ-5段階に比定されるものであり、6世紀末葉~7世紀前葉の年代幅が想定されよう。出土例が少なく、いまだ編年的位置を明確にできる段階ではないが、当古墳の新羅焼台付壺も7世紀前半の枠内に収まる可能性が強いことを示唆している。このほか、金銅製弓弭の出土は割見塚古墳と共通し、鉄鏃には無関片刃箭式が認められる。

森山塚古墳では、石室内からの出土品は把手状鉄製品と多数の鉄釘(棺釘)に限られ、他に墳丘盛土中・周堀から須恵器(坏・甕)・土師器(坏・高坏・甕・手捏ね)が出土している。土器群の大半は小片であり、下層に存在した遺構の土器群が混入している疑いもあるので、古墳築造年代との間には一定の時間差を想定する必要もあろう。土師器坏は、須恵器模倣タイプの中でも扁平化の進んだものが目立つが、一部に碗タイプの坏も見られ、総体として6世紀末葉~7世紀初頭の様相を示している。須恵器坏は陶邑編年(中村編年)Ⅱ-5~6段階併行のものと思われる。これらの土器群はあくまでも当古墳築造の上限を示す資料ではあるが、今のところその下降性を示す積極的な資料も見当たらず、上記の土器群が示す年代に比較的近い時期の築造と考えるのが妥当ではないかと思われる。

亀塚古墳からは、明治期の調査で須恵器(フラスコ型瓶・平瓶・短頸壺・台付長頸壺)、再調査で銅鏡・蜻蛉玉・ガラス小玉などの出土が知られている。当古墳の須恵器については未公表であり、検討する機会を得ていない。

以上、内裏塚古墳群内における終末期方墳の出土遺物については、相互に比較検討し得る遺物の不足により、現段階では遺物編年の上から各古墳の前後関係を明確にすることは難しい。大局的には各古墳とも遺物相の上限が7世紀前半の様相を示すものが多く、築造年代もその範囲内にあると認めてよいだろう。これら一連の終末期方墳は、墳丘・周堀設計に見られる企画性、石室構築技術に見られる共通性においても、比較的短期間の内に相次いで造営された可能性の強いことを物語っている。すなわち各古墳の被葬者は、それぞれが世代を異にする系譜的關係ではなく、墳丘規模の段階性が示すように、むしろ階層的な関係にあり、その造営期間も数10年程度の時間幅の中に収束されると見てよいだろう。そして現段階の資料からは、その造営期間を7世紀前葉~中葉期に比定するのが妥当ではないかと考えている。

なお小糸川流域では、現在までのところ内裏塚古墳群以外の地域には、確実な終末期古墳の調査例は見当たらない。下流域北岸の丘陵に所在した北子安堀込古墳は一辺11mの方墳として調査されたが、内部施設が検出されず、近世供養塚の可能性が強いと判断されている。同じく北岸丘陵の東仲田古墳は、組合せ式箱形石棺を内部施設とし、後期後半以降の所産と見られるが墳形不明で出土遺物もなく、時期を明確にし得ない。従って、小糸川流域の丘陵部における終末期古墳の様相は、横穴墓との関連を含め今後の調査に待つところが大きいといえよう。

(3) 小糸川流域以南における横穴墓の様相

小糸川以南地域には総数約130箇所にあつた横穴墓群の存在が確認されている。このうち、これまでに発掘調査が実施されている例を中心として、南から順にその様相を概観してみたい。

湊川流域の西山横穴群では総数30基の横穴墓が調査され、ほぼ群全体の様相が判明した事例として注目される。当横穴群の横穴墓は、構造的に次の3類型に大別される⁽¹⁷⁾。

A類～羨道・玄室からなる両袖型の平面プランで、棺床等の施設を伴わず、羨道・玄室の床面が同一レベルのもの。(羨道が短く、玄室の比較的大きいものが多い。)

B類～玄室の左右側壁もしくは奥壁に接して1～3基の棺床が造り出されているもの。(羨道は狭長。棺床の数と構築位置によって細分が可能である。)本横穴群では最も数が多い。

C類～棺床を伴わないが、玄室全体が羨道より歴然と高く構築されているもの。(隔壁型と呼ばれる。羨道は狭長で玄室の小さいものが多い。)

以上の3類型の前後関係は、基本的にA→B→Cの推移をたどるものと推測される。ここで各類型の構築下限年代推定の目安となる出土須恵器について検討すると、A類型の横穴墓から陶器(中村編年)Ⅱ-4～5段階に比定される坏が出土しており、B類型の中でも古い段階に位置づけられる奥壁側に棺床を有するタイプからもⅡ-5段階比定の坏が出土している。B類型の横穴墓には主としてⅡ-6～Ⅲ-2段階の須恵器が伴い、C類型の横穴墓およびB類型側壁棺床型の一部にⅢ-3段階の坏が伴出している。このことから、資料的にはなお不十分な点もあるが、A類型の構築年代を6世紀末葉～7世紀初頭、B類型の構築年代を7世紀前葉～後葉、C類型の構築年代を7世紀後葉～末葉に求めるのが妥当ではないかと考えられる。

同じ湊川流域の大湊横穴群においても、西山横穴群と同様A・B・Cの同類型が存在しているが、ここではB類型の片側壁棺床型とC類型が多数を占めている。古くから開口しているものが多いため、出土遺物には乏しいが、C類型のうちの1基から陶器Ⅲ-3段階以降に比定される須恵器長頸壺、B類型の1基からⅢ-2段階併行と見られる須恵器碗が出土している。なおB類型・C類型の横穴墓で船の線刻壁画が認められている。

染川流域の神宿横穴群は、調査横穴8基が全てB類型で、中でも片側壁に棺床を持つものが8基中6基を占める。出土須恵器はⅡ-6～Ⅲ-1段階併行のものが主体であり、短期間内に相次いで造営された横穴群と見られる。

小久保川流域の山岸横穴群では4基の横穴墓が調査され、うち1基がC類型、他はA類型であった。しかしA類型の3基も玄室部が狭く、構造の簡略化されたものであり、必ずしも先行形態とは考えられない。ここでは遺物は検出されていない。向原横穴群では、遺存状態の悪いものが多かったが、A～Cの各類型が認められ、玄室の大きいA類型の横穴墓からは6世紀末葉前後に比定される土師器坏群および陶器Ⅱ-6段階併行の須恵器坏が出土している。

岩瀬川流域の絹根方横穴群では、11基の横穴墓が確認されているが、そのほとんどがC類型で

あり、羨道・玄室の比高差は1.3~1.4m前後と、湊川流域のC類型に比べれば目立って高くなっている。このうち1号横穴において「大同元年」・「許世」、10号横穴において「木」の線刻文字が確認され、房総に關係の深い豪族巨勢氏・紀氏との關係が論じられている。また大同元年は西暦806年に相当し、造営年代との開きを考慮する必要があるとしても、祭祀継続年代を推測する上では有効な資料になり得るものと考えられる。因みに線刻文字については、小久保川流域の岩井作横穴群においても「倭文」の文字が確認されているほか、大貫・佐貫地区を中心に幾つかの事例が確認されており、金石文研究上貴重な資料を提供している。

小糸川下流域北岸の花里山横穴群は、総数4基が調査されている。うち1基(3号横穴)はC類型であり、2号・4号は長方形玄室の中央を溝で区画する特殊な構造のものである。後者は小糸川以南地域で例を見ないものであるが、B類型とした棺床型に類するものとも考えられる。3号横穴の出土須恵器が7世紀後葉~末葉の様相を示すのに対し、4号横穴の須恵器には陶邑Ⅱ-5~6段階のものが含まれており、玄室区分型の横穴墓がC類型の先行形態であることを示している。

以上のように、小糸川以南地域における横穴墓は、目下のところ6世紀末頃を初現として、7世紀末あるいは一部8世紀まで造営されたと考えられ、形態の上では、南部の湊川流域に棺床を有するタイプの横穴が多く、北部の岩瀬・小久保川流域などでは隔壁型で無棺床の横穴が目立つという傾向を認めることができる。

それでは、湊川など小糸川以南の諸水系において、高塚古墳が少なく、横穴墓が隆盛した要因は何か。一つには自然地理的要因が考えられよう。この地域は沖積地面積が狭い上に、平坦面をもつ台地や丘陵にも乏しく、高塚古墳の造営に適していない反面、丘陵の斜面には加工の容易な砂岩・泥岩層が多く露頭し、横穴墓構築の条件としては恵まれている。また沖積地面積が少ないということは、水田耕作に適した可耕地が少ないということであり、人口の絶対数も少なく、もともと大きな政治勢力が発生し難い地理的基盤にあったと見做すべきである。ただし湊川流域では5世紀代の古墳も知られており、また近年の分布調査によれば、各河川の下流低地部には少数ながら横穴式石室をもつ高塚古墳の存在も確認される⁽¹⁸⁾。従って後期段階には、一般の横穴群造営者層より卓越した有力豪族が拠点的に存在する状況であったと見られる。

ところで後期後半から終末期にかけて、爆発的勢いで横穴群が造営された背景には、6世紀以降の鉄器の普及と灌漑技術の進歩に伴う谷水田の大規模な開発が考えられよう。この谷水田開発が、小糸川流域の首長によって組織的に推し進められたものか、または各流域毎にある程度個別的に進められたものかは定かでないが、少なくともこの時期以降、小糸川以南の諸水系が前代に比して大幅な人口増、地域的发展を示したことは確かであろう。ただ当該地域における横穴群造営集団の集落遺跡はこれまでほとんど明らかにされておらず、その実態の究明は、今後各河川の河岸段丘・谷間部を中心とした調査の進捗に委ねられる部分が多い。

(4) 小糸川流域の初期寺院

小糸川中流域右岸の君津市内蓑輪に所在する九十九坊廃寺は、小糸川流域では最古の寺院址と考えられる。小糸川を南方に望む丘陵裾の平坦面に立地する寺院址で、道祖神裏古墳、八重原1・2号墳、星谷上古墳などを含む八重原古墳群の隣接地に存在している。

本寺院址は、「九十九坊」という字名や古瓦の散布によって古くから注目されており、1933年に大場磐雄らにより塔址を中心とした発掘調査が実施された。その結果、方形基壇上に載る心礎と側柱礎の存在が明らかにされ、合わせて行なわれた周辺部の踏査、古瓦の散布状況等から、北に講堂、南東に金堂、南西に塔を配置する「法隆寺式」の伽藍配置が推定された。⁽¹⁹⁾その後、塔址周辺は県指定史跡として保存されてきたが、1984・1985年の2ヶ年度に亘り、千葉県教育委員会による寺域・伽藍配置の把握を目的とした確認調査が実施されている。この結果、金堂の位置等になお不明確な点を残すものの、法隆寺式の伽藍配置がほぼ裏付けられ、出土瓦の様式（三重圏文縁四葉単弁蓮華文鏡瓦など）と合わせて、その創建年代は7世紀末葉（白鳳期）に比定されている。⁽²⁰⁾ただし発掘調査では、良好な土器の出土が認められず、年代的な傍証資料にはやや欠ける。なお関東地方で、法隆寺式伽藍配置を採用した古代寺院址としては、本寺のほかには下総国分僧寺と相模国分僧寺が知られている。

本寺の創建にあたって、内裏塚古墳群を造営した当水系の盟主的豪族層が大きく関与していたであろうことは推測に難くない。割見塚古墳をはじめとする方墳群造営の終焉と本寺の創建には時間的な連続性も認めることができる。しかし本寺の位置は、内裏塚古墳群の東端から約6kmも東に離れており、他地域において見られる終末期古墳と初期寺院の位置関係に比べれば、やや距離的な隔たりの大きい観がある。本寺の造営場所が、内裏塚古墳群に近い下流域の沖積地を避け、あえて中流域の丘陵部に求められたことには何らかの理由があるものと思われる。内裏塚古墳群の所在する飯野地区が、西方に突出した地理的な袋小路となっているのに比べ、八重原地区は南北を最短距離で結ぶ陸上交通路の要衝にあたっていることも、その理由の一つと考えてよいのではなかろうか。本寺院址の対岸にあたる君津市・郡周辺は周准郡衙の推定地とされており、律令期に入って、小糸川水系の中心地がこの地区に固定したことは確かであろう。ただし内裏塚古墳群周辺には古墳時代中・後期の集落遺跡がほとんど確認されておらず、首長豪族の居住地が当初から小糸川をやや遡った場所にあった可能性も高い。⁽²¹⁾

なお、本寺に瓦を供給した瓦窯址として、木更津市大久保の牛ヶ作瓦窯址と君津市中村の大鷲瓦窯址が知られている。牛ヶ作瓦窯址は小櫃川水系との境界にあたる畑沢川流域に位置し、大鷲瓦窯址は小糸川をやや遡った北岸の丘陵地帯で、いずれも本寺からは比較的近い距離にある。このうち、大鷲瓦窯で焼かれた瓦は、小櫃川流域の初期寺院である大寺廃寺にも多く供給されていたことが明らかにされており、周准郡・望陀郡両地域の経済的な交流関係を窺うことができる。

2. 小櫃川流域

(1) 小櫃川流域における首長系古墳の消長

小櫃川下流域における首長墓群は、小糸川下流域の内裏塚古墳群、養老川下流域の姉崎古墳群に比べれば、やや散在的な在り方を示しているといえる。強いて首長級古墳の分布の中心を求めるとすれば、金鈴塚古墳を中心とした長須賀地区と祇園大塚山古墳を中心とした祇園地区を結ぶ地域、すなわち太田・清見台丘陵北麓の沖積地一帯を中期以降の主要墓域として囲むことができる。従来「木更津古墳群」という呼称も一部使用されているが、群集墳も散在する当地域ではその範囲が不明確であり、ここでは小櫃川下流域の首長墓群に限定して、内裏塚古墳群・姉崎古墳群と対比する意味で、「祇園・長須賀古墳群」という呼称を使用したい。

なお小櫃川流域では、中流域においても首長級の大形前方後円墳の存在が幾つか知られており、これらを含めて小櫃川流域における首長墓の推移を語ることにしたい。

a. 前期

小櫃川下流域の前期前方後円墳として、前章で問題とした、小糸川水系との中間地点(烏田川流域)に位置する手古塚古墳(墳丘長60m)と、小櫃川河口部北岸の丘陵上に存在する坂戸神社古墳(墳丘長63m)の2基が知られている。

手古塚古墳は墳丘の大半を地山整形によって築成した柄鏡型の前方後円墳で、粘土槨から仿製三角縁神獣鏡・車輪石・石釧・鉄製籠手など畿内色の強い副葬品および布留式中段階比定の土師器甕などが出土しており、その被葬者の性格は外来系の首長であるとの見方が強い。築造時期は4世紀後半と考えられている。なお1985年に隣接した丘陵において、手古塚の年代に近い時期の築造と見られる低墳丘方墳数基が調査されており、振文鏡・水晶勾玉等、該種の方墳としては傑出した遺物相をもつものが見られることから、手古塚古墳被葬者の背後集団の存在が看取される。

坂戸神社古墳も地山整形と見られる柄鏡型前方後円墳であり、規模・立地形態とも手古塚古墳に近似するが、前方部幅がやや狭く、前方部の向きは手古塚と反対方向を示す。かつて付近から勾玉が出土したという記録があるが、全く調査は行われていない。

これらの2古墳が、時期を異にする同一系譜上の首長墓であるのか、あるいは領域を異にする分立した首長墓であるのかは、坂戸神社古墳の内容が不明であるため、判然としない。仮に分立的な首長墓であったとした場合、中期では最も古い首長墓と目される銚子塚古墳が小櫃川により近い高柳地区に築造されていることを考慮すれば、位置的な関係から坂戸神社古墳を小櫃川系の首長墓、手古塚古墳を小糸川系の首長墓と想定することもできる。ただ手古塚—内裏塚の直線距離が6km、手古塚—銚子塚の距離が5.5mと大きな差はなく、手古塚古墳の保有する副葬品の卓越性から考えても、手古塚古墳がむしろ、小櫃川・小糸川両水系に亘る下流域海岸部を統帥する首長墓としての性格を有している可能性も強い。いずれにしても未調査の坂戸神社古墳が、内部

施設・副葬品等においてどのような内容を有しているかによって、手古塚古墳の位置づけ、前期首長墓の領域の問題も微妙に変わってこよう。

一方、中流域の小櫃地区には、前期古墳と見られる3基の100m級大形前方後円墳の存在が認められている。左岸の君津市岩出に所在する飯籠塚古墳(岩出4号墳)、右岸の君津市俵田に所在する白山神社古墳(館之内1号墳)、同じく右岸の箕輪に所在する浅間神社古墳(上新田1号墳)である。これらの3基は川の両岸に分れるものの、その間隔は1～1.5kmと比較的狭いエリア内に寄っており、同一系譜上の首長墓であることを推測させる。

このうち飯籠塚古墳は、1986年に測量調査を実施しており、墳丘長100～105m・後円部径50m・前方部幅35m・後円部高7m・前方部比高差7mという計測値が得られている。丘陵端の舌状に張り出す緩傾斜面に築造されており、後円部は急勾配で高く、大部分を盛土によって築成していると思われる。前方部が狭長で側面の開きがほとんどない柄鏡型の墳形を呈し、前方へ向かってのせり上がりも見られない。谷に面した墳丘の片側側面の裾部が一回り増幅されたようになっており、谷側から見た後円部の高さは、10m以上の外観をもつ。

白山神社古墳は、従前の遺跡分布図等に墳丘長76mと記載されていたが、最近の略測で、墳丘長88m・後円部径48m・前方部幅37m・後円部高11m・前方部比高差5.2mという計測値を得ている。立地は飯籠塚古墳に近似するがやや低位にあり、後円部が急勾配で盛土を主体とした築成、後円部側に周堀の区画を備える点も飯籠塚古墳と共通する。ただ前方部は狭長ながら開きを見せ、前方部が前端へ向かってせり上がっている点から、飯籠塚古墳に比して後出的形態と見做すことができる。後円部頂に盗掘孔があり、内部施設の残存は危ぶまれる。

浅間神社古墳は、上記の2古墳とは異なって丘陵頂の高所に占地しており、地山整形を主体とした築成と判断される。略測では墳丘長100～110m・後円部径55m・後円部高7.2mと計測され、飯籠塚古墳を若干上回る規模となる可能性がある。現状では、後円部を2m以上掘り窪めて神社社殿が建ち、前方部側へ参道が続いているため、後円部と前方部がスロープ状に連なっているが、これは社殿建設時の改変によるものと考えられ、本来は後円部と前方部の比高差が大きい(6m以上)墳形であったと見られる。ただ前方部側面の整形が明確さを欠くことから、前方後円墳と断定するには一抹の疑問もある。内部施設は破壊されている疑いが強い。

以上3基の古墳は、墳丘規模の上で下流域の前期前方後円墳(手古塚古墳・坂戸神社古墳)を凌駕しており、少なくとも前期の段階には、下流域の勢力を上回る程の強大な勢力が中流域・小櫃地区に存在していたと見られる。3古墳の内部施設等の実態が全く明らかでないため、築造時期の詳細についてはなお明確さを欠くが、100m級前期古墳の存在が確認されるのは、今のところ小櫃川・小糸川両水系を含む君津郡域全体の中でもこの地区が唯一であり、今富塚山古墳・姉崎天神山古墳などを造営した養老川下流域の勢力と並ぶ南房総の中核的な首長が当地区を本拠地として存在していたことは間違いないであろう。

b. 中期

小櫃川河口部南岸の沖積地に位置する高柳銚子塚古墳は、現在後円部の墳丘残骸を残すのみであるが、地積図等の検討から墳丘長110～130mの前方後円墳であったとされ、残丘上から長持形石棺の底石と見られる石材が確認されている。木更津「長州塚」出土と伝えられる石製模造品一括は、この古墳からの出土品の可能性が強いものであり、鋸齒文を陰刻した鏡・直弧文を持つ刀子などの精巧品を含む⁽²²⁾。鎌は曲刃鎌を模したものである。また当古墳の円筒埴輪はB種ヨコハケを伴うものであり、内裏塚古墳と同様、畑沢埴輪窯の製品である可能性が強いという胎土分析の結果が得られている⁽²³⁾。これらの点から、銚子塚古墳の築造時期は5世紀中葉でもその前半に入る段階と推定される。しかしながら、手古塚古墳と当古墳の間には、なお半世紀近い時期的な飛躍を認めざるを得ず、小糸川流域の場合と同様に、中期前半に遡ることが確実な首長墓の存否は明確でない。

ただ太田山丘陵北麓に占地した前方後方墳・鳥越古墳(墳丘長25m)は、小規模ながら銚子塚古墳に先行する可能性の強い古墳として注意される。2基の埋葬施設内から、方格規矩鏡・石臼・石杵・玉類などが出土しており、前期以来低墳丘の方形墓群を営んできた在地族長クラスの中でも卓越的位置にあった者の墳墓として位置づけることができよう。

銚子塚古墳に後続する首長墓として、銚子塚からおよそ2.5km南東に離れた祇園大塚山古墳を位置づけ得る。墳丘はすでに現存しないが、地積図等から墳丘長100m前後の前方後円墳であった可能性が指摘されている。内部施設は石棺と記録され、副葬品には画文帯四仏四獣鏡・金銅製眉庇付冑・銀製垂耳飾など特筆すべきものが多い。近年、当古墳の円筒埴輪と陶器編年ON46型式併行とされる須恵器甕が紹介されており⁽²⁴⁾、その築造時期は5世紀中葉の後半頃に位置づけるのが妥当と考えられる。

5世紀後葉～末葉期の首長墓は今のところ判然としていない。祇園大塚山古墳の西北西700mに位置する図那浅間古墳、あるいは請西丘陵の北端に位置する鹿島塚古墳などが、この時期の首長墓の有力候補と考えられるが、図那浅間神社古墳は墳形に問題があり、鹿島塚古墳は自然丘陵利用型の前方後円墳であるため、未調査の現時点では時期を推定することが難しい。

なお、前期に大形前方後円墳の築造が認められた中流域の小櫃周辺地区には、少なくとも銚子塚古墳や大塚山古墳、あるいは金鈴塚古墳に匹敵するような中期～後期の大型古墳の存在は確認することができず、おそらく銚子塚古墳の築造前後を境に、下流域を本拠とする首長の勢力圏下に組み込まれたものと考えられる。ただ小櫃地区の戸崎古墳群などにおいて、30～50mクラスの前方後円墳や大形円墳が群的に認められる点は、小櫃川水系におけるこの地域の相対的な優位性を示すものであり、中流域の核となるような有力豪族が小櫃周辺に存在していたことを物語っている。小櫃川中流域は律令期に入ってから「畔蒜郡」に属し、下流域の「望陀郡」と分離されたことも、古墳時代における独自の地域圏の形成を反映するものであろう。

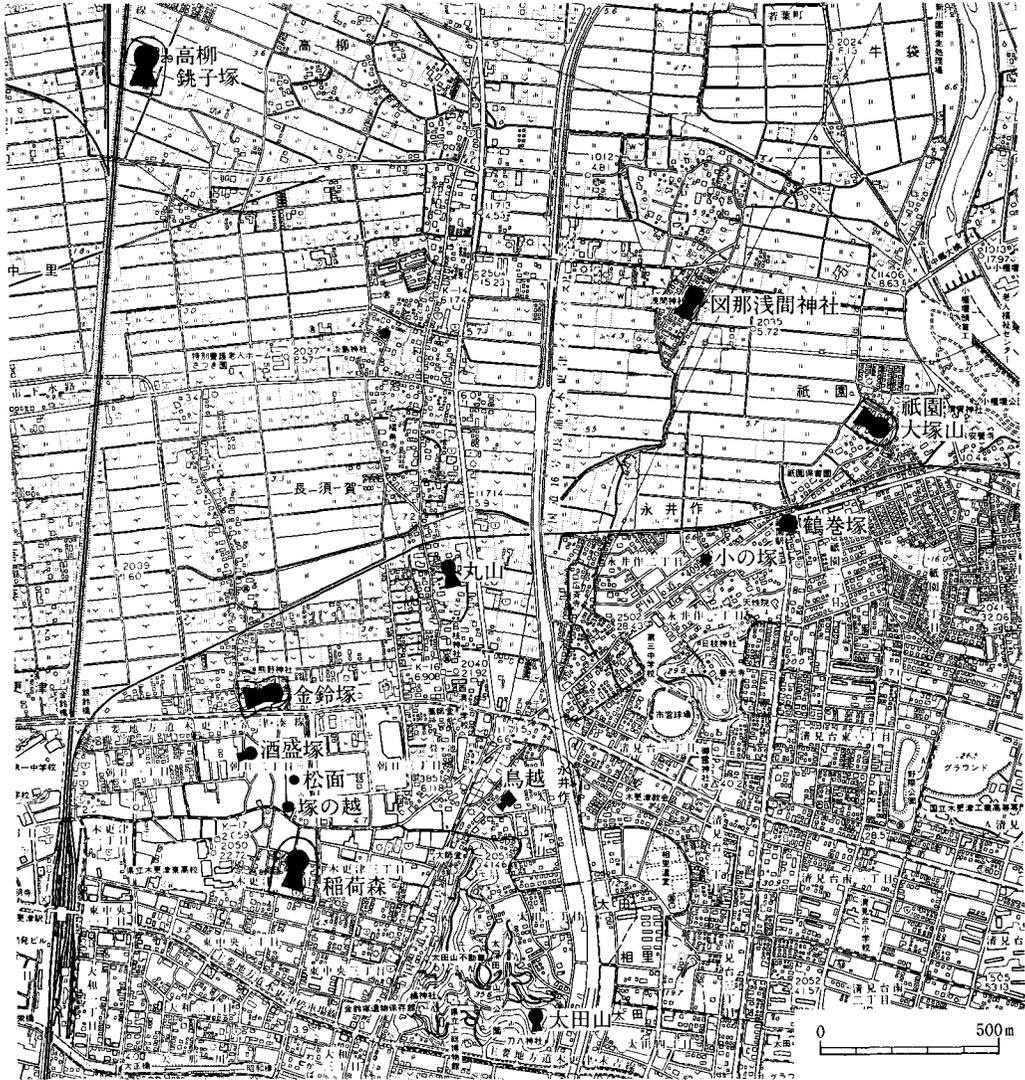


図5 祇園・長須賀古墳群主要古墳分布図 (1/20,000)

c. 後期

6世紀代における小櫃川流域の盟主的首長墓は、一貫して下流域の低地部に造営されたと考えられる。しかしながら現在内容が知られているものは、いずれも6世紀後半の築造と見做されるものであり、明らかに6世紀前半の時期相を示す大形古墳は見出すことができない。この点は小糸川流域における首長墓の空白と全く同様の事象と言い得るだろう。

6世紀後半代の首長墓群は、祇園鶴巻塚古墳を除いて、長須賀南部地区（通称元新地付近）に集約されてくる傾向が認められる。これらの古墳はいずれも発掘時期が古く、現存するものも限られることから、最末期に位置づけ得る金鈴塚古墳以外には、内部施設等の詳細が不明となっているものが多い。このうち、墳丘長100m級の大形前方後円墳であったことが明らかなのは稲荷

森古墳と金鈴塚古墳の2基のみである。

祇園地区に位置する鶴巻塚古墳は、大形の円墳であったと言われるが、帆立貝形古墳ないしは前方後円墳であった可能性も高いと推測される。内部施設は明治時代に地元住民によって発掘され、「石造六尺角、長持形ノモノ」であったと記録されることから、箱形石棺と解されるが、遺物が2次にわたって出土していることから、石室内に蔵された石棺であったという見方もできる。副葬品には四仏四獣鏡・六神鏡・環頭、圭頭、円頭大刀、金銅製馬具類など優れたものが多く見られ、盟主墳の系列に位置づけても遜色ない内容を示している。須恵器は陶器TK43型式が主体であることから、築造年代は6世紀後葉と見られる。内部施設に石棺を使用することや四仏四獣鏡の存在等から、時期的な隔たりは大きいものの、至近距離にある祇園大塚山古墳との系譜関係の強さを窺うこともできる。

木更津駅東側の市街地内の公園に墳丘の一部が残る稲荷森古墳は、明治末年頃に削平されたといわれ、銅鈴・鏡等の遺物の出土が伝わるが、内部施設についての記録は残されていない。戦後早くに撮影された航空写真の検討によれば、盾形周堀の痕跡が明らかであり、地図との比較から墳丘長は100～120m程に達していたと見られる。この古墳が金鈴塚古墳の一段階前の盟主墳であった可能性が強いが、埴輪の有無を含め、その検証は今後の課題といえる。

稲荷森古墳の北側には消滅した松面古墳・塚の越古墳の存在が知られている。1938年に緊急調査された松面古墳は、金銅製双魚佩・双龍環頭大刀・金銅製馬具類など出土遺物に優れたものが見られ、切石を使用した横穴式石室の存在が記録される。塚の越古墳は、明治末期の発掘で、変形四獣鏡・鞍金具・琥珀玉などの遺物が伝わる。これらの古墳は、出土遺物の卓越性から見て、前方後円墳であった可能性も否定できないが、昭和初期の地籍図にはその形跡を認めることができず、また内裏塚古墳群内の大形円墳に優れた副葬品を有するものが見られることなどから考えれば、首長系集団の一員を被葬者とする円墳であったとしてもおかしくはないであろう。松面古墳の須恵器はTK209型式のものが主体を占めるようであり、至近に位置する金鈴塚古墳との時間的な近接性が考えられる。

その北側、金鈴塚古墳との間に位置する酒盛塚古墳は「地積一段歩余」の前方後円墳であったといわれ、「石槨」の存在と鏡・刀剣・甲冑類の出土が記録されるが、遺物は伝存せず、不明な点が多い。航空写真の検討からは、小形の前方後円墳と見られる。盟主墳に列するものではないとしても、内裏塚古墳群における中小規模の前方後円墳（西原古墳・蕨塚古墳など）と同格の位置づけができるものであろう。

金鈴塚古墳は、報告書で墳丘長95m・後円部径55m・前方部幅72mという復原案が示されており、この数値によれば後円部径・前方部幅は、内裏塚古墳群中の三条塚古墳にほぼ等しい値を示している。しかし墳丘長は三条塚古墳より短く、また地籍図の検討から墳丘相似形の周堀がめぐるとされている点も同古墳とは異なる。ただし、墳丘・周堀については発掘調査を経ていないため、再検討の余地があることはいうまでもない。

当古墳においては、長期間にわたる追葬が考えられ、出土須恵器にも型式的な幅があるが、主体となる最古の一群は陶邑 TK209 型式のものであり、その築造年代を 6 世紀末葉期に求めるのが妥当と考えられる。内部施設は小形の切石を使用した横穴式石室が採用されているが、その平面形態が無袖式の狭長なプランを呈することは、内裏塚古墳群中に多く見られる無袖式乱石積石室と通じるものであり、基本的の上総南西部の地域色を帯びた石室として捉えることができるであろう。また当古墳の石室構築技法が、後に出現した山伏作 5 号墳・関田塚 2 号墳の石室にも基本的に受け継がれていることは注目される。

一方、金鈴塚古墳の北東 700m に位置する丸山古墳も、金鈴塚古墳に近い時期の築造と推定される。墳丘長 65～75m と記録される前方後円墳であり、現在前方部のみが残存している。後円部径に比して前方部幅の小さい形態であったようであり、これは内裏塚古墳群中の諸例にも見られるように、70m 級以下の前方後円墳の一般的な形態の特徴として理解される。横穴式石室は全長 11m を測る無袖式の狭長なもので、小形の砂岩切石を持ち送り式に積んで構築されていたといわれ、金鈴塚古墳との共通性が窺える。出土須恵器は陶邑編年 TK209 型式併行のものが主体であり、時期的にも金鈴塚古墳と近接して従属的關係にある古墳と見られる。

以上見てきたように、祇園・長須賀古墳群における 6 世紀後半代の首長墓の構成は 100m 級大形前方後円墳を中心として、中小規模の前方後円墳、および墳丘規模・副葬品等において傑出した内容をもつ円墳が一定のエリア内に併存する状況であり、小糸川下流域の内裏塚古墳群における該期の様相ときわめて近似した在り方を示していることが注目される。ただこの古墳群では、木更津の市街化が早く進んだためもあって、内裏塚古墳群よりも破壊の度合いが著しく、100m 級古墳といえどもかろうじて墳丘の残骸が残るのみといった惨状を呈している有様で、全く記録が残されないままに消滅した古墳の数も多いと考えられる⁽²⁵⁾。

これらの首長系古墳は、内裏塚古墳群の場合と同様に、大形前方後円墳から円墳に至るまではほとんど例外なく横穴式石室を内部施設としていたと見られ、一般の群集墳の墓制にまで横穴式石室が浸透しなかった当地域にあっては、横穴式石室を備えていることそれ自体が古墳被葬者の階層を明示していると判断してもよいと思われる。また木更津地域においても、小糸川流域と同様に無袖式で狭長なプランの石室が主體的であったと見られるが、内容の知られる金鈴塚古墳や丸山古墳の石室では、いずれも構築材として小形の切石を使用しており、この点が自然石積石室を連綿と踏襲した内裏塚古墳群とは異なる点といえるだろう。

(2) 小櫃川流域における終末期古墳

a. 首長系終末期古墳の不在

現在知り得るかぎりにおいては、沖積地の祇園・長須賀古墳群内には、少なくとも内裏塚古墳群内におけるような首長系終末期古墳の存在は確認することができない。これは、単に方墳の存在が確認されないというだけでなく、内部施設・出土遺物等において明確に 7 世紀代に下る様相

を示す古墳が見当たらないのである。

その理由として次の3つの仮説が想定されよう。一つは本来沖積地に存在していた首長系終末期古墳が記録を残さずに消滅していること、一つは首長層の墓域が丘陵部へと移動し、古墳規模も著しく縮小したこと、さらに一つは首長系古墳の造営が最後の前方後円墳を以って終焉したことである。これらの3つの仮定には、それぞれ消極的な根拠を見出すことができるものの、現段階ではいずれの妥当性が最も高いものか判断を下しかねる。

ただ最末期の大形前方後円墳と考えられる金鈴塚古墳の追葬期間が7世紀前半代まで及んでいることは、その遺物相から明らかであり、その最終被葬者が古墳時代最後の首長であったと考えた場合、上記のうちの第3の仮説が妥当性の高いものとなる。

b. 下流域における小規模終末期古墳

小櫃川下流域では、台地・丘陵部の群集墳的古墳群の中において、いくつかの小規模な終末期古墳の存在を認めることができる。このうち横穴式石室を有する古墳は、今のところ山伏作5号墳・関田塚2号墳の2基のみであり、他は箱形石棺・木棺直葬の内部施設を有するものである。

山伏作古墳群は、前期以来多数の小規模古墳が連綿と造営され続けてきた請古墳群⁽²⁶⁾のうち南西側の丘陵に位置する支群で、切石積横穴式石室を有する5号墳と木棺直葬の方墳4基が調査されており、終末期の墓域を形成している。

山伏作5号墳は、一辺13.1~13.7mの方墳で、二重周堀を有し、内周堀外辺長17.2~17.9m・外周堀外辺長21.9~22.8mを測る。墳丘・内周堀・外周堀の外郭規模を高麗尺に換算するとそれぞれ40尺・50尺・60尺にほぼ整合する値を示し、小規模ながら整った企画性を持つ方墳として捉えられる。内部施設は、砂岩切石積・無袖式横穴式石室で、玄室長5.45m・全長6.7mを測る。側壁は直方体の小形切石を内彎状に持ち送っており、単室・無袖式の平面形態とともに、金鈴塚古墳の石室と基本的に共通した構築手法が取られている。ただし個々の石材の形状が整っていること、前方に門柱石を有し、奥壁に大形石材の使用が認められること、床石が存在しないことなどの点が金鈴塚古墳石室と異なり、より簡略かつ終末期的様相を示す。石室内には多数の土器群のみが副葬されており、須恵器蓋坏・長頸壺・俵形瓶・甕、土師器坏の各器種が認められる。須恵器群は陶邑編年のⅢ型式3段階(中村編年)に比定し得るもので、7世紀後葉~末葉の築造年代が想定される。

他の4基はいずれも5号墳より墳丘規模が小さく、確認された墳丘高も概して低平で、内部施設は木棺直葬と見られるものである。「A-1号周溝」として報告された方墳は、小規模ながら二重周堀を有し、墳丘辺長6.5~6.9m・内周堀外辺長8.4~9.0m・外周堀外辺長12.1~12.8mの規模で、高麗尺換算による20尺・25尺・35尺の企画が想定される。このA-1号および4号墳(墳丘辺長10.6~10.8m)・6号墳(墳丘最大辺長11m)の周堀内からは、それぞれ5号墳とはほぼ同じ時期に比定される須恵器蓋坏が出土しており、これらの方墳は、短期間に相次いで造営されたと考えられる。従って、唯一石室をもつ5号墳と他の方墳との間には、年代差よりもむしろ

る被葬者の階層的差異を見出すことができよう。

このほか請西古墳群内では、大山台支群・東山支群などにおいて、墳丘を確認し得ない所謂「方形周溝遺構」が何基か検出されている。これらはいずれも時期決定の手掛かりとなる遺物を欠いているが、山伏作の方墳群よりもやや下降する時期の所産と考えられ、請西丘陵群の中で7世紀後半以降の連続的な墓制を追うことができるようである。ただ山伏作支群形成以前の7世紀前半代まで遡る方墳は、今のところ明らかにされておらず、先行する円墳群の造営が7世紀代のどの段階まで続くのかについても今後明確にする必要がある。

塚原5号墳は、前記の「請西古墳群」とは谷2つ隔てた西側の丘陵上に所在し、一辺12.2m・周堀外辺長14.5mを測る方墳で、中央部の墓壇に箱形石棺を埋置する。石棺は棺身・棺蓋とも各3個の内側を刳抜いた石材を組み合わせた「刳抜き組合せ式」ともいうべきものであり、このような造りの箱形石棺は、房総ではほとんど類例を見ないものである。石棺内からは、遺存状態の良い人骨一体が検出されたが、副葬品は皆無であり、周堀内からも時期決定に足る遺物は得られていない。しかし、墳形や溝幅の一定した周堀から見て、7世紀代に位置づけ得る古墳と考えてよいだろう。同古墳の周囲では、40m級前方後円墳1基と円墳数基が調査されているが、方墳は他に確認されていない。

関田塚古墳群は、前期に手古塚古墳が造営された小浜地区のやや奥まった丘陵に位置し、孤立的に存在する2基の終末期方墳のみから構成される。2基の方墳は、丘陵中腹部の尾根の高まりを利用して築造された山寄せ式の方墳であり、いずれも周堀は谷側には存在せず、山側の約半分のみめぐっている。

関田塚2号墳は墳丘辺長7.7mで、切石積横穴式石室を内部施設とする。石室は全長5.0mで、平面形態は無袖式であるが、玄室中程に板状の仕切り石を設置して床面に段差を設け、前後2室に区分している。側壁の構築は直方体の石材を互目積にして内側へ持ち送っており、金鈴塚古墳・山伏作5号墳に共通した手法が取られている。床面には切石が敷かれ、その一部に切組みの技法が用いられている。石室は天井石の崩壊が著しかったとは言え、盗掘を受けたような形跡を認め難かったが、石室内から副葬品等は全く検出されず、石室外前面の前庭部に相当する位置から出土した須恵器短頸壺、および周堀内出土の須恵器坏により、山伏作5号墳にはほぼ近い7世紀末葉の築造年代が考えられる。

なお、間仕切状に玄室内を区画する石室は、千葉県内では、我孫子市白山1号墳・栄町みそ岩屋古墳・山武町埴谷1, 2号墳など切石積石室の諸例があるほか、内裏塚古墳群内の西谷古墳のように、乱石積の石室で同様の仕切り石を有するものもある。このうち切石積石室の諸例はいずれも短い羨道部が別に付設されていることから、この仕切り石は埋葬空間と通路の境界ではなく、埋葬空間内の区分であることが明らかである。その意味で、この種の石室は複室石室の簡略なものという見方もできるが、むしろその初現は所謂複室石室よりも以前からあり、独自に継承されたタイプといえるようである。

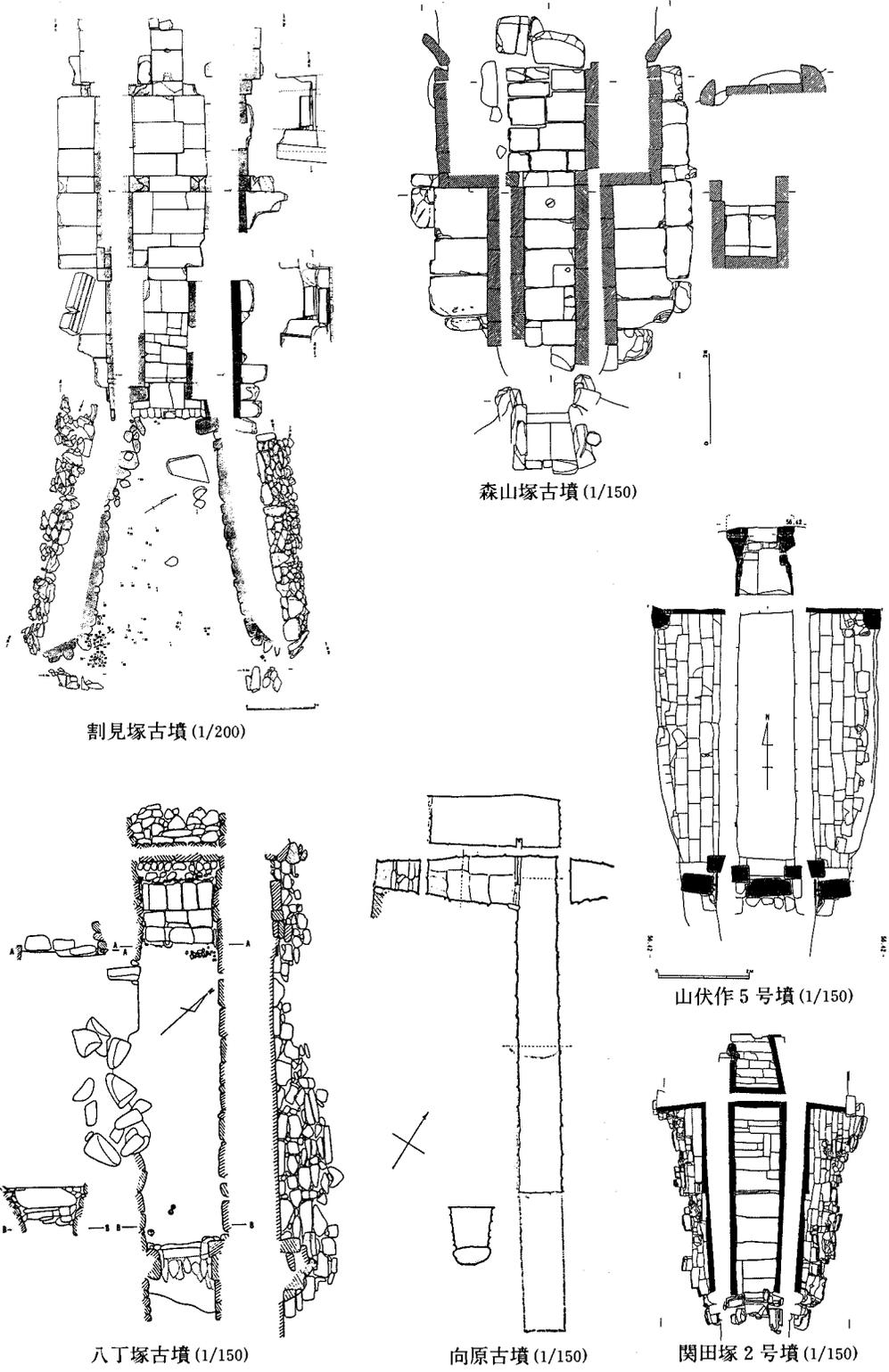


図6 上総南西部地域の切石使用横穴式石室

関田塚1号墳は、2号墳の西側に隣接する方墳で、墳丘辺長7.0mを測り、墳丘規模に大差はないが周堀幅が狭いため、全体規模は2号墳よりも小さい。内部施設は砂岩板石組合せ式の箱形石棺で、内法長1.3m・幅0.3mを測る小形のものであり、成人を埋葬した石棺とは考え難い。遺物は検出されていないが、1号墳に近い時期の築造と推定され、被葬者は1号墳の被葬者と近親関係にあった者であろうと思われる。なお組合せ式箱形石棺は、手古塚古墳背後の丘陵斜面に展開するマミヤク遺跡においても単独で1基検出されている。

以上、小櫃川下流域の丘陵部（請西・小浜地区）において判明している終末期古墳の様相を概観してきた。この地域においては、切石積横穴式石室・箱形石棺・木棺直葬の内部施設をもつ小規模方墳（一部に周堀を伴わない箱形石棺）の築造がそれぞれ認められ、今後とも当該期の古墳の事例は追加されるものと思われる。これまでの調査例から見ると、横穴式石室をもつ終末期古墳は相対的に少なく、箱形石棺がこれに次ぎ、木棺直葬が最も多いと考えられる。横穴式石室をもつ古墳は、所属する終末期古墳の群中では、規模の点において主墳的な位置を占めており、石室の造りも比較的大形で精巧なものとなっている。この点は、簡略な切石積横穴式石室が群在的な在り方を示す千葉市東南部地区などとは様相が異なり、当地域においては、横穴式石室の存在そのものに一定の階層的優位性を認める必要があるかもしれない。

ただ横穴式石室を有するものであっても、これらの方墳は、その規模や群構成から、首長墓系統の古墳とするにはあまりにもその格差が大きく、6世紀後半代に当地区で営まれた小規模前方後円墳および円墳群と基本的に被葬者の階層を同じくする墓制として捉えるのが自然であろう。しかし今のところ、これらの方墳には7世紀末葉の遺物相を示すものが多く、小規模前方後円墳・円墳群の造営時期との間には一定の時間的隔りを認めざるを得ないようである。

一方、これらの終末期方墳群の隣接地には、小浜地区の二十歩横穴群、請西地区の諏訪谷横穴群、太田山丘陵の西谷横穴群などといった横穴墓の存在も確認されており、終末期における墓制の多様な展開を見ることができる。このうち近年発掘調査の実施された諏訪谷横穴群は、横穴墓としては多量の副葬品が出土したことで注目され、伴出した須恵器・土師器は、6世紀末葉～7世紀前葉に比定し得るものであった。編年的な観点から見ると、請西丘陵という小地域の中では、円墳群→横穴群→方墳群という墓制の推移も想定されることになる。

いずれにしても、6世紀後半代に盛行した群集墳的円墳群と横穴群・終末期方墳群との間に絶対数の変化（古墳造営者層の数的変化）が見られるのか、造墓域に偏在的・集約的傾向が認められるかどうかなど、小規模古墳における墓制の変革にかかわる事象を明らかにするためには、なお今後の調査に待つところが多い。

c. 中流域における小規模終末期古墳

中流域では、小櫃川の屈曲点付近にあたる木更津市田川地区の丘陵において、いくつかの小規模終末期方墳の存在が判明している。1987年以降、継続的に発掘調査を実施している宮脇古墳群では、5基以上の終末期方墳が確認され、このうち最大規模のものは、一辺18～19m・高さ1.5m

の墳丘を有する。この古墳からは複数の木棺直葬施設が検出され、副葬品として直刀・刀子が認められたほか、墳頂部から須恵器フラスコ型瓶が出土している。またこれに近い規模と見られる別の方墳は、部分的に調査された周堀内から須恵器長頸壺が出土した。このほか一辺10m未満の方墳数基が調査されているが、いずれも内部施設は単基の土墳で、副葬品等の遺物は検出されていない。宮脇古墳群ではこれらの終末期古墳のほかに、石櫃等の火葬蔵骨施設を伴う8世紀代の低墳丘方形墓数基が検出されており、その中には二重周堀をもつ比較的規模の大きいものも認められている。これらはかつて「方形周溝状遺構」等の暫定的な名称で報告されてきたものであるが、7世紀代の終末期方墳の延長線上にある墓制であることは明らかであり、火葬採用以降の段階にも方形の周堀を巡らせ、一定の面積を占有する墓制の伝統が根強く残存したことが知られる。これらの方形墓の名称については、埋葬施設に地域的な差異が認められることもあって、いまだ適切な呼称が付されていないが、墓としての性格が明白となった現在、当地域では「火葬方墳」ないしは「火葬方形区画墓」などと呼称して、直葬段階の終末期方墳と区別する必要がある。

なお、石櫃を伴う火葬段階の方形墓は、1986～1990年に大規模調査が実施された袖ヶ浦町大竹遺跡群、あるいは北岸の支流松川流域の打越岱遺跡などにおいても検出されており、いずれもその造営時期は8世紀に属するものと考えられる。

一方、宮脇古墳群よりもやや北方の丘陵上において調査された北谷古墳も、終末期方墳の一つと目される。一辺約8mの小規模方墳で、序面に木炭を敷いた特殊な土壇を内部施設としており、周堀内から古墳時代後期の土器片が多量に出土したとされる。

以上のように、小櫃川中流域の丘陵部でも、7世紀後半代における終末期方墳およびこれに連続する火葬段階の方形墓の造営を認めることができる。7世紀段階では、比較的規模の大きい方墳についても木棺直葬の内部施設が採用されており、切石積石室・箱形石棺といった内部施設を採用し得た下流域の方墳造営者層との間に、一定の格差を見出すことも可能であろう。

(3) 小櫃川流域の初期寺院

小櫃川下流域右岸沖積地の木更津市大寺に所在する大寺廃寺址は、大伽藍の存在が想定される初期寺院として古くから注目されている。明治時代初期の記録とされる『上総国望陀郡大寺村沿革』には、「往古、九十九ノ大堂アリシガ、天正十七年大島某ト云フ暴賊、該寺院へ放火シ、尽ク灰燼ニ帰スト、諸記ニ見ユ、大寺ノ名、其大伽藍ノアリタル據ナルヘシ」と大寺の由来が記され、その後室町末期には寺が再興されたが、明治初年の神仏分離令によって仏寺は全く廃絶し、その地に併立していた熊野神社のみが村社として残されたといわれる。また寺院想定地周辺には「堂ノ後」・「内西ノ門」・「外西ノ門」など伽藍の存在を示す小字名がいくつか残っており、熊野神社境内には、塔の存在を裏付ける凝灰質砂岩製の露盤が残存する。

当廃寺は1934年の村道工事の際に、畑地中から古瓦が出土したのを契機として小熊吉蔵らによ

る実地調査が行なわれ、瓦当文様（鋸歯文縁八葉複弁蓮華文鏡瓦）から大和川原寺との関連が指摘された。⁽²⁷⁾その後、須田勉らによって資料の追加・検討が重ねられており、その創建年代は上総国の寺院址の中では最も古い天智朝（662～672年）まで遡るもので、本寺成立の背景には中央政府の直接的関与があったとする見方が示されている。⁽²⁸⁾

大寺廃寺の位置は、祇園・長須賀古墳群の東方にあたり、大形古墳の中で最も東に位置する祇園大塚山古墳との直線距離は1.5mを測る。大寺造営の経済的基盤が、この地に歴代の大形古墳を造営した小櫃川水系の盟主的豪族層に求められることは推測に難くない。しかし大寺造営以降の段階と考えられる7世紀末葉に至っても、丘陵部においては先に述べたような小規模終末期古墳が造営されており、各小地域の有力者層の墓制にまで仏教の影響が浸透するのは、8世紀以降の段階と考えられる。ちなみに、祇園・長須賀古墳群内において、これまでに7世紀代の大形古墳の存在が確認されていないのは、寺院の造営が他地域に先んじて行なわれていることと関連するかもしれない。またその点で、金鈴塚古墳への追葬が比較的長い期間にわたって行なわれていることにも注意を向ける必要がある。

このほか小櫃川流域では、畔蒜郡域に属する中流域の馬来田地区において、真里谷廃寺の存在が知られる。1934年に篠崎四郎らが付近を発掘して、有心二重圈文鏡瓦・唐草文字瓦等の資料を得ているが、瓦の様式はいずれも9世紀以降に比定されるものである。⁽²⁹⁾真里谷地区には3基の前方後円墳（60～70mクラス2基を含む）の存在が確認されており、古墳時代の一時期において中流域の拠点的位置を占めた地域であったと見られるが、真里谷廃寺との時期的隔りは大きく、両者の内容に不明点の多い現在、これらを積極的に結びつける根拠は乏しい。

小 結

以上、上総南西部地域にあたる小糸川・小櫃川両水系の首長系古墳の消長、終末期古墳の様相、それに続く初期寺院の概要について、若干の問題点の指摘を交えながら述べてきた。最後に両水系の共通点、ならびにその特質を明らかにして本稿のまとめとしたい。

小糸川下流域の内裏塚古墳群と小櫃川下流域の祇園・長須賀古墳群における中期～後期の首長墓群の展開は、非常に近似した在り方を示しているといえる。5世紀中葉に100m級大形前方後円墳を築きながら、5世紀末から6世紀前半の時期には、「断絶期」とも呼び得るような大形古墳造営の空白が見られ、6世紀後半に至って再び100m級大形前方後円墳が比較的短い間隔で連続的に築造されている。また6世紀後半には中小規模の前方後円墳および出土遺物等に卓越した内容をもつ円墳が、あたかも盟主墳の周囲を取り囲むように連綿と造営され、首長集団の墓域を形成していったと見られる。

6世紀前半における首長墓の空白については、消滅古墳や未調査古墳の存在、あるいは現段階における遺物編年観の妥当性を考慮する必要もあろうが、それにしても6世紀中葉以降の古墳数

の急増と、それに反映される首長層内部の構造的変化は歴然たる画期として捉えられ、その前段階との隔絶は著しいといえるだろう。5世紀中葉の内裏塚古墳、また高柳銚子塚古墳・祇園大塚山古墳の段階で流域全体を掌握し、強大で揺るぎない首長権を確立したかに見える両水系の首長も、その後の一時期、やや低迷した期間があったと解釈すべきであろうか。

その点、隣接圏である養老川水系では、下流域の姉崎古墳群内で原1号墳・山王山古墳、中流域の江古田金環塚古墳など、いずれも100m未満の規模ながら、5世紀末～6世紀前半に該当する盟主墳が継起的に造営されており、小櫃川・小糸川の両流域と対称的であるといえる。養老川流域では、むしろ6世紀後半以降、盟主的存在と呼び得るような大形古墳が見られなくなり、流域の核となる勢力が弱体化の一途を辿ったものと推測される。このような盟主墳の盛衰は単に各流域の内的な変化に留まらず、房総という広域圏の中での勢力関係、さらには畿内政権との各地方首長との関係の変化をも、当然反映していると思ふべきであろう。

小櫃川・小糸川両地域は、6世紀後半の段階に至って著しく勢力を伸張し、群馬県高崎市域の古墳群、埼玉県埼玉古墳群および千葉県山武郡域の古墳群などと並んで、東国の中でもきわめて傑出した勢力を現出させた地域であることは、首長系古墳の墳丘規模や副葬品の内容から見て明らかである。両流域は隣接しているながらも、各々独立性を保って強大な首長権を確立していたと思ふべきで、多数の国造が並立した房総地域の群雄割拠的特色を示すものといえる。

房総、とくに東京湾岸の諸水系では、各河川が丘陵によって隔てられているために、独立的な地域圏を形成しやすい地理的環境にあり、各流域の首長が海上交通路を媒介として、それぞれ独自に畿内政権との外交関係を展開していったため、毛野や武蔵のように首長権が一極集中することなく、個々の勢力、とくに小櫃・小糸の2大勢力が競合的に強大化したと見られる。

7世紀代に入り、所謂飛鳥時代を迎えると、畿内における政情の変化を反映して、地方首長層の構造も改変を受けることとなる。小糸川流域の内裏塚古墳群では、最大規模の割見塚古墳を中心として、一定の規格性をもつ二重周堀の方墳群の序列的な築造が認められ、前代の大形前方後円墳—中小前方後円墳—円墳というヒエラルキーが再編・圧縮された形となって現われる。しかしながら一方の小櫃川流域では、首長系と目される方墳を今のところ確認することができず、消滅方墳の可能性を含めて、7世紀代の首長の動向が未解決の問題として残される。

古墳時代終末期の房総では、印波国造比定地の岩屋古墳、武射国造比定地の駄ノ塚古墳、そして須恵国造比定地の割見塚古墳がそれぞれ中核的な大形方墳として存在し、墳丘規模の上では、印波—武射—須恵の序列を認め得る。この序列は6世紀後半段階における勢力順位と逆転したものと見ることができ、7世紀に入った段階で房総の首長層の勢力関係に画期的な変化があったことを認めて良いだろう。

金鈴塚古墳における豪華な副葬品内容から見て、少なくとも6世紀末葉段階には、実質的に小糸川流域の首長を凌いでいたとも見られるような、強大な勢力を掌握していた小櫃川流域の首長層が、7世紀代に忽然と姿を消してしまったということがあるのであろうか。この問題につ

いては、終末期における小糸川首長の相対的な降格、金鈴塚古墳における長期追葬、そして初期寺院・大寺の先駆的な造営などの諸事象との関連と合わせて、今後の調査・研究にその謎の解明が持ち越されることになろう。

当地域では、ここ数年来重要古墳の調査が相次いで行なわれており、調査の度ごとに事実関係が更新されている状況にある。本稿は、第1稿を1988年末までに執筆し提出済であったが、調査の進展によって改めるべき部分が多くなったため、1990年10月までに一部を改稿した。

なお浅学ゆえに立論の焦点が定まらず、必要以上の長文となったことをご容赦頂きたい。

註

- (1) 律令期における畔蒜郡域（小櫃川中流域）を含む。同郡は江戸時代に望陀郡に併合された。
- (2) 小沢洋「君津地区『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会 1990に最新の分布調査成果が収録されている。
- (3) 後円部周堀の調査を担当した笹生衛は、当古墳の企画に内裏塚古墳群中の中小規模の前方後円墳との類似性を認め、6世紀後半説を示唆する見解を提示している。
笹生衛『君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1989
- (4) 九条塚古墳の1911年（明治44）の発掘記録については正式報文がなく、『考古学雑誌』第1巻第11号（1911）に掲載された彙報「上総国飯野発掘の金銅丸玉」という小文、『君津郡郡誌』（1927）の記事、國學院大学所蔵の『柴田常恵野帳』等によって概略を知り得るのみである。上記の文献の間には、石室規模・出土遺物品目などに若干の相違が見られる。
出土遺物は、金銅製空玉が東京国立博物館、他の大部分が飯野小学校に保管されている。
- (5) 調査の結果、前調査の報文（柴田常恵「上総君津郡青堀町の平塚」『考古学研究』第2年第1号（1928）の記述と石室の計測値・細部の構造などにおいて相違する点が認められた。とくに入口付近の形状については、前調査時に転石を壁面と誤認していた疑いもある。
- (6) 現小糸川河口部の対岸にあたる君津市坂田・大和田地区の低位丘陵に権現塚古墳・虫神古墳といった横穴式石室墳（円墳）の存在したことが知られるが、これらに内裏塚古墳群との距離も近く、石室構造等にも共通点が多いことから、被葬者集団を同じくする者として捉えることも可能である。
- (7) 台地・丘陵部における後期小規模古墳の調査例はさほど多いとはいえないが、現在君津市街となっている台地上に存在した南子安古墳・下迫古墳など、これまでに内容が知られているものはいずれも木棺直葬となっている。
- (8) 『東京国立博物館図版目録 古墳遺物編（関東Ⅲ）』1986に「富津市二間塚 内裏塚出土品」として掲載される遺物が当古墳の出土遺物に相当する。当古墳の飾大刀については、「飯野村出土品」としてしばしば取り上げられている（神林淳雄「金銅装大刀と金銅製柄頭」『考古学雑誌』第29巻第4号 1939など）。
なお、『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会 1986では、内裏塚古墳報文（柴田常恵「上総君津郡飯野村内裏塚」『東京人類学会雑誌』第22巻第249号 1906）に記された「北方に位置する古塚は…」の記事をもとに、「内裏塚北方前方後円墳」という架空の古墳の存在を想定しているが、この記事は出土遺物品目の一致等から白姫塚古墳を指すものと思われ、柴田が当該発掘古墳を古塚古墳と誤認して記述したものと考えられる。
- (9) 『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』（前掲）に須恵器実測図のみ掲載。
- (10) 内裏塚古墳群内の方墳の築造企画については卑見を述べたこともあるが（小沢洋「富津市割見塚古墳の諸問題」『史館』第19号 1986）、その後の調査の進展により修正すべき点が幾つかある。
- (11) 森浩一『古墳の発掘』中央公論社 1965。但し同氏は、仁徳陵など晋尺（1尺24cm）を設計尺とした蓋然性の高い先行形式の古墳との比較から、見瀬丸山・欽明陵の2古墳についても晋尺によって設計された可能性が強いものと結論づけている。
- (12) 原田道雄「横穴式複室石室に関する覚え書き」『史館』第3号 1974、田中広明「終末期古墳の地域性—関東地方の加工石材使用石室の系譜—」『土曜考古』第12号 1987
- (13) 相山林継「内裏塚古墳群の年代」『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』1986

- (14) 後藤建一氏のご教示による。
- (15) 後藤守一「上古時代の杏葉に就て」『日本古代文化研究』1942 所収, 坂本美夫『馬具』= ユー・サイエンス社 1985
- (16) 江浦洋「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題」『太井遺跡(その2)』大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1987
- (17) 西山横穴群を中心とした横穴の形態分類と編年については、牛房茂行による分類・編年案が示されているが、形態を細分し過ぎたために、かえって基本的推移を捉え得ぬものとなっている。
野中徹・牛房茂行他『西山横穴群調査報告書』西山横穴群発掘調査団 1979
- (18) 岩瀬川流域の絹桶荷塚古墳(伝前方後円墳)、染川流域の御陵塚古墳、湊川流域の町田古墳、白狐川流域の松原古墳などで、いずれも低地に存在している。
- (19) 篠崎四郎「上総国九十九坊廃寺趾」『房総郷土研究』第1巻第10号 1934
- (20) 森本和男『君津市九十九坊廃寺趾確認調査報告書』千葉県教育委員会 1985
- (21) 古墳時代後期集落の存在は、八幡神社古墳近くの沖積地に展開する君津市常代遺跡において確認されているが、今のところ住居址軒数もさほど多くはなく、豪族居館に相当するような遺構も検出されていない。
- (22) 椋山林継「菅生周辺の遺跡」『上総菅生遺跡』木更津市教育委員会 1980
- (23) 三辻利一「千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の胎土分析」『千葉県文化財センター研究紀要8』1983
- (24) 白井久美子「祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器」『古代』第83号 1987
- (25) 横穴式石室墳の分布は、矢那川を介して木更津市街地南側にも及んでいたようである。「四房古墳群」(現在の木更津市文京・幸町付近)と呼ばれるものがそれであり、飾大刀などが出土した古墳もあったと伝えられる。なお、さらに南の烏田川流域の丘陵上にも桜井瑠璃光塚古墳という横穴式石室墳(自然石乱石積)が知られており、該期の首長系集団の墓域が一部丘陵上にも及んでいたことを示唆している。これらを含めて首長系古墳の墓域を括った場合、大形古墳の分布のみに着目した「祇園・長須賀古墳群」の呼称は適切でないかもしれない。
- (26) 請西古墳群では、各支群によってある程度时期的なまとまりが認められるようであり、調査が進捗すれば、墓域の時間的推移を辿ることも可能となろう。ただ現段階の知見では、5世紀前半および7世紀前半に該当する古墳が明確に抽出できないことを始めとして、最も多数を占めるとされる6世紀代の古墳の編年についても明確化されていない状況であり、古墳造営数の変化にどのような波が捉えられるのかについても、編年基準の問題と合わせて、今後の調査に負うところが大きい。
- (27) 小熊吉蔵「大寺廃寺趾考」『房総郷土研究』第1巻第10号 1934
- (28) 安藤鴻基・須田勉「上総国大寺廃寺の古瓦について」『金鈴』第20号 1968, 須田勉「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980
- (29) 篠崎四郎「上総国真里谷廃寺趾」『考古学雑誌』第27巻第10号 1937

〔補 遺〕

本稿の初稿を作成した1988年末以来、刊行の遅延により丸3年以上が経過している。また一部改稿を行なった1990年秋からも1年半余の時間が経過した。本稿が対象とする君津郡地域は近年の急激な開発ラッシュとも相俟って発掘調査による事実の更新が著しいことは前記の如くであり、1990年・1991年度においても新事実の判明が相次いだ。またその間に、数氏によって関係論文の発表もなされ、本稿の内容に修正ないしは補筆を余儀なくされる部分も幾つか生じている。初稿作成以来、筆者自身の解釈にも、変化している箇所があり、1990・1991年の公表に係わる筆者の他稿と若干の齟齬を来す部分もある。筆者にとって、本稿の存在が一つの懸案として長く尾を引いてしまう結果となっているが、校正にあたり、既述の原稿に手を加える時間的猶予と余力もないので、以下に、主要な事実の追加と若干のコメントのみを掲げ、補遺とすることとしたい。上記の事情に鑑み、若干の紙数の消費をご容赦願いたい。

①袖ヶ浦町は1991年4月に市制施行され、袖ヶ浦市となっている。

②1990年度後半の調査で、湊川流域の富津市岩坂において、二重周溝を有する方墳(町田古墳)・墳丘長62mの前方後円墳(上北原古墳)・円筒・形象埴輪をもつ直径28mの円墳(塚田古墳)の存在が圃場整備事

業に伴う確認調査によって明らかにされた。これらは、湊川流域の河岸段丘上に形成された同流域の独自の首長墓群として捉えることができ、小糸川以南の諸水系の中では最大の河川である湊川流域にも、規模は劣るながら、古墳時代後期～終末期に至る独立した政治的領域を認定し得る可能性がきわめて濃厚になった。塚田古墳については1991年度にも追加調査が行なわれて、造出し（またはブリッジ）が付設されている可能性も生じており、上北原古墳については1992年度に再調査が予定されている。いずれも墳丘は残骸を残すのみであるが、横穴式石室を内蔵しているようである。これらの諸古墳の内容が判明するに従って、小糸川流域に従属的であると仮定した湊川流域の古墳の評価も多少変わってこよう。

③内裏塚古墳群の確認調査は、1990年度後半に稲荷山古墳・稲荷塚古墳・白姫塚古墳の3基について実施されている。

稲荷山古墳については、二重の盾形周堀と墳丘裾をめぐる円筒埴輪列の存在が明らかにされたほか、石室入口付近についての発掘もなされ、閉塞石と考えられる砂岩質の自然礫が無秩序な状況で多数検出されていることから、自然石乱石積の横穴式石室の存在が想定される。入口部の状況から見て、石室は後世の乱掘をかなり受けているように見受けられた。時期決定の有力な手掛かりとなるような土器、および副葬品は検出されていないが、円筒埴輪は九条塚古墳のものよりは新相を示し、古塚古墳との新旧は決し難い。この調査の結果においても九条塚→稲荷山・古塚→三条塚という先後関係はほぼ追認し得るものの、現段階においては、これらの古墳が6世紀中葉～末葉の比較的短い期間内に連続的に造営されたという大局的把握から一歩具体化した証査を得ることは難しく、墳丘規模においてやや劣る古塚を「盟主」の系列から外して稲荷山とほぼ同世代の階層的差異をもつ古墳と位置づけるのが妥当なようである。

稲荷塚古墳については、江戸時代の絵図および墳丘削平時の関係者から、終末期方墳の可能性が高いことを確認済であったが、周堀確認の結果、方墳と確定した。但し二重周堀の確認はなされていない。規模については、墳丘南北辺長17.6m、東西辺長21.4m、周堀外辺長38.8mと計測されている。

白姫塚古墳については、副葬品内容の傑出性、および柴田報文の記述（註8）から、前方後円墳の可能性を考慮する必要があるが、今回の調査ではこの点を明確化するに至っていない。

④小櫃川流域における丘陵上の終末期古墳として、1990年度後半に調査された請西地区の大山台36号墳がある。墳丘辺長10m、周堀外辺長13mの方墳で、切石積横穴式石室をもち、須恵器と多数の玉類が出土している。山伏作5号墳に近接した時期の築造と見られ、7世紀末葉段階における方墳築造域に複数のブロックがあることが確認された。また大山台支群の西側斜面においては、1991年度調査で多数の低墳丘小方墳群の存在も明らかにされており、7世紀中頃の須恵器を伴うものも認められている。

⑤1991年度実施中の小浜地区・俵ヶ谷古墳群2次調査で、乱石積横穴式石室をもつ径10mの円墳（6号墳）の存在が明らかとなった。築造時期は6世紀後半代と見られる。従来当地域においては、丘陵上の小規模古墳には、終末期古墳を除けば横穴式石室を有するものが希少であり、横穴式石室＝首長系という感覚で捉えていた部分があったが、ごく小規模な古墳にも横穴式石室の採用例があることを確認し得た意味は大きい。君津市虫神古墳・権現塚古墳、木更津市瑠璃光塚古墳など、これまでに確認されている丘陵上の横穴式石室墳は比較的出土遺物が豊富なことから、被葬者が首長系集団に所属する可能性も指摘していたが（註6）、これらの古墳の評価についても再考の余地があろう。但し、俵ヶ谷6号墳のような小規模横穴式石室墳は今のところ例外的存在であり、今後丘陵上で同様の横穴式石室墳が検出されたとしても、6世紀後半段階において木棺直葬墳が主体を占めるという傾向に変わりはないものと思われる。

⑥本稿の最終稿を提出後、当地域の研究者により発表された、本稿の内容と関連する論文として次のようなものがある。

- a. 酒巻忠史「駒久保古墳群の調査(1)」『研究紀要Ⅳ』君津郡市文化財センター 1991
- b. 小沢洋「九条塚古墳の再検討」『研究紀要Ⅳ』君津郡市文化財センター 1991
- c. 西原崇浩「上総地方の横穴墓の様相」『立正考古』第30号 1991
- d. 小高幸男「終末期古墳の様相」『立正考古』第30号 1991

内裏塚古墳群内終末期方墳換算表

計測値単位 = m

		墳丘辺長	内周堀幅	内周堀辺長	周堤幅	外周堀幅	外周堀辺長
割見塚古墳	計測値	40.0~40.2	11.5~11.8	63.3	14.3~15.0	6.2~7.1	106~107.5
	高麗尺	114~115 (120尺)	33~34 (30尺)	181 (180尺)	41~43 (40尺)	18~20 (20尺)	303~307 (300尺)
	唐尺	133~134 (140尺)	38~39 (35尺)	211 (210尺)	47~50 (50尺)	21~23 (20尺)	353~358 (350尺)
亀塚古墳	計測値	33.2~(37)	9.4~11.8	53.2~58	11.6~13.2	7.6~9.4	94~99
	高麗尺	95~(106) (100尺)	27~34 (25尺)	152~165 (150尺)	33~37 (35尺)	22~27 (25尺)	269~282 (270尺)
	唐尺	111~123 (110尺)	31~39 (35尺)	177~193 (180尺)	38~44 (40尺)	25~31 (30尺)	313~330 (320尺)
森山塚古墳	計測値	26.4~27	7.8	42.0~42.6			
	高麗尺	75~77 (80尺)	22 (20尺)	120~122 (120尺)			
	唐尺	88~90尺 (90尺)	26 (25尺)	140~142 (140尺)			
野々間古墳	計測値	19.0~19.5	7.0	33.0~33.5	7.0~7.2	5.8	59.5
	高麗尺	54~56 (60尺)	20 (20尺)	94~96 (100尺)	20~21 (20尺)	17 (15尺)	170 (170尺)
	唐尺	63~65 (70尺)	23 (20尺)	110~112 (110尺)	23~24 (20尺)	19 (20尺)	198 (190尺)
稲荷塚古墳	計測値	21.4	8.2~9.4	38.8			
	高麗尺	61 (60尺)	23~26 (25尺)	110 (110尺)			
	唐尺	71 (70尺)	27~31 (30尺)	129 (130尺)			

- e. 小高幸男「内裏塚古墳群研究再論」『研究紀要V』君津都市文化財センター 1991
- f. 椛山林継「横穴式石室の需要と変革」『研究紀要V』君津都市文化財センター 1991
- g. 小沢洋「小櫃の一首長墓をめぐる考察」『研究紀要V』君津都市文化財センター 1991

このうち d・e 論文の中で小高氏は、内裏塚古墳群内の終末期方墳について、墳丘・周堀・石室ともに唐尺によって設計されていると判定し、これらの古墳が7世紀初頭から後半までの間に、1基ずつ(世代を異にして)築造されたものと推断している。ただ同氏の論文では、高麗尺・唐尺の双方の換算値を比較検証することなく、結論のみを提示した形となっている。

石室に関しては、ほぼ全容が明らかにされている割見塚古墳・森山塚古墳の石室について、各部のデータを検討する限り、確かに30cmを単位とする尺度(唐尺)との整合性がより高いと見做される。但し墳丘・周堀の規模に関しては、新しい調査成果をもとに改めて各古墳の計測値を換算してみても、必ずしも高麗尺に比して唐尺の整合性が高いとは認め難い(上表参照)。

そもそも10尺程度の区切りで完尺と見做すのであれば、白石太一郎氏が以前に指摘されているように(白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」『ヒストリア』第49号 1967)、いずれの尺度を用いても完尺の想定が可能なわけであり、その限りにおいては、使用尺度を俄に決定することは難しい。しかしながら、筆者は本文中において述べているような各古墳間の規模の比関係、および築造時期の短期間への収束性等から考えて、高麗尺換算値の方がより設計尺としての妥当性が高いと考えている。なお提示した計測値はいずれも周堀の上端を起点とするものであるが、設計時には周堀の下端を基準線としている可能

性も強く、墳丘辺長については計測値よりもやや大きく、逆に周堀幅については計測値よりやや小さい尺値を想定するのが適切ではないかとしている。

小高氏の論文は、亀塚・稻荷塚両古墳の確認調査以前、野々間古墳の2次調査以前に執筆した筆者の前論文（「富津市割見塚古墳の諸問題Ⅰ」1986）の検証過程については何ら触れることなく、結論のみを一方的に否定する論調で書かれているが、氏の提示したデータの中には、換尺にあたっての計測値の恣意的な変更（野々間古墳の墳丘辺長）や内周堀外辺長と周堀幅・外周堀幅の総和が外周堀外辺長と一致していない（野々間古墳）など、データの扱い方そのものに問題点があり、結論の導き方が理に適ったものとは言いがたい。また氏は5基の方墳の中で、野々間古墳を最古の築造と考え、7世紀初頭に比定しているが、これは唐尺の使用年代と矛盾を来すものではないかと私考する。筆者の前論文は前記のとおり、その後の調査成果によって修正すべき点のあることは自認しているが、今のところ基本的には、墳丘・周堀等の兆域設計に関する高麗尺の使用と各古墳の並列的位置づけを大きく変更すべき根拠を見出すには至っていない。

なお、石室に関する尺度論の適用については、前記した墳丘・周堀における設計尺と相違する可能性があることから、これまで具体的な論述を保留してきたが、兆域の設計と石室の設計の基準尺が必ずしも同一でなくともよいと考えている。石室の設計が石材の加工技術など、より先進的な技術導入、工人の招来を必要としているのに比べ、墳丘・周堀の兆域設計は在来的技術・方式を応用することによって十分可能であったと考えられるからである。前方後円墳以来の二重周堀に見る兆域の面的な拡大指向は終末期における東国特有の権威表示の伝統であったかのようにも見られ、兆域と石室がそれぞれ異なる技術者の設計によって分業的に行なわれていた可能性も一考する必要があるものと思われる。

（君津都市文化財センター）

Aspects of Tumuli in the Final Kofun Period
in the South-western Part of Kazusa

OZAWA Hiroshi

There existed two powerful political blocks in south-western Kazusa in the Tumulus Period. One was the Makuta-koku in the basin of the Obitsu River, and the other was the Sue-koku in the basin of the Koito River. In these two areas, the continuous construction of large tumuli can be observed through almost all the stages of the Tumulus Period. This indicates that these areas maintained a particularly stable power among the various chiefs in the Bôsô area.

In the basin of the Koito River, in the early part of the Tumulus Period, small and medium-sized keyhole tombs with quadrangular rear mound existed on the hills of the middle and lower reaches of the river. However, in the middle to later period, groups of chiefs' tombs were formed centering around the Dairizuka Tumuli Group on the alluvial plain of the lower reaches. After the Dairizuka Tumulus, the largest keyhole-shaped tumulus in the Bôsô, was constructed in the middle of the 5th century, there was a period in the first half of the 6th century, when there is uncertainty about the existence of chiefs' tombs. Then, in the latter half of the 6th century, there was continuous construction of 100m-long keyhole-shaped tumuli, and tomb areas for the chief family group were formed, including small and medium-sized keyhole-shaped and circular mounds. In the 7th century, several square tombs, including the Warimizuka Tumulus, were constructed, and the tomb system of the chief's family group went through a complete change. These square tumuli had very strong common features, such as double surrounding ditches, and ashlarred stone rooms. It can be assumed that there was a class significance in the uniform formation of square tumuli of the final period in the various areas in the Bôsô District.

In the basin of the Obitsu River, there was already a chief power based in the Obitsu district on the middle reaches of the river, and large keyhole-shaped tumuli, such as the Igozuka and Hakusan-Jinja Tumuli, were constructed. In the middle Tumulus Period, however, chiefs' tomb groups were consistently formed in the Gion and Nagasuka districts on the alluvial plain of the lower reaches, the Takayanagi-Chôshizuka Tumulus being the first example. Thereafter, the development is notably similar to that in the basin of the Koito River. However, many of the chiefs' tombs in the basin of the Obitsu River have disappeared, a large part of the chronological relationship is not clear. Furthermore, with the Kinreizuka Tumulus built at the end of the 6th century is as the last example, after which no chief-type tumuli (square mounds) are to be seen in the basin of the Obitsu River. This leaves a large question concerning trends in their relationship to the appearance of the Odera, the oldest temple in Kazusa.